貝塚市埋蔵文化財調査報告　第42集

加治・神前・畠中遺跡発掘調査概要

1997.3.31

貝塚市教育委員会

加治・神前・畠中遺跡発掘調査概要

1997.3.31

貝塚市教育委員会

はじめに

加治・神前・畠中遺跡は本市の中央部を流れる近木川右岸に位置し、縄文時代より続く本市最大の遺跡範囲を有する遺跡であります。市役所庁舎周辺においては多くの調査が実施され、古墳時代から中世にかけての遺構を多数確認しており、当地域にその時代の中心部をなす集落等が存在していたことが窺えます。

今回、新たに調査のメスが入り、本遺跡の歴史を明らかにする機会に恵まれ、また、本調査概要報告書として刊行するはこびとなりましたことは、過去の人々の暮らしを明らかにすることにおいて有意義なことと考えます。

本書刊行にあたりまして、皆様の文化財に対するご理解を深めていただくとともに、文化財の保護、保存、研究の一助となれば幸いに存じます。

なお、調査並びに本書作成にあたり、関係者各位には多大なご理解、ご協力をいただき、末筆ではありますがここに深く感謝の意を表します。

平成９年３月31日

貝塚市教育委員会
教育長　福　井　昱　彦

例　　言

1．本書は、貝塚市役所総務部庶務課、住宅・都市整備公団の依頼により、大阪府貝塚市加神、他地内に所在する加治・神前・畠中遺跡において実施した、共同住宅建設に伴う事前発掘調査の概要報告である。

2．確認調査は平成６年10月11日から10月15日にかけて実施し、発掘調査は平成７年４月３日から11月17日にかけて実施した。なお、内業調査については平成８年12月26日に終了した。

3．調査にあたっては、貝塚市役所総務部庶務課、住宅・都市整備公団より多大な理解と協力を得た。記して感謝の意を表す。

4．発掘調査は貝塚市教育委員会社会教育課学芸員前川浩一、上野裕子が担当した。
現地・内業調査および本書作成にかかる諸作業については下記の諸氏の参加を得て実施した。
稲田広美　尾越功一　梶原　剛　木戸えり子　田口陽子　高橋梨紗
中辻澄子　西野京子　橋本さおり　溝端美也子　山本一吉　山本寿子
米子千智

5．本書の編集は上野が行い、執筆は第１章、付論は前川が担当し、それ以外は上野が担当した。

6．遺物写真撮影は、上野が行った。

7．出土遺物、調査記録は貝塚市教育委員会において保管している。

8．遺物整理にあたっては坪之内　徹氏（奈良女子大学）、森村健一氏、嶋谷和彦氏（堺市立埋蔵文化財センター）のご教示を得た。記して感謝の意を表す。

目　　次

はじめに
例　　言
目　　次（本文目次、図版目次、挿図目次）

第　1　章　調査に至る経過 …… 1
第　2　章　位置と環境 …… 3
第　3　章　調査成果 …… 5
　　1．調査の概要 …… 5
　　2．基本層序 …… 6
　　3．検出遺構 …… 6
　　4．出土遺物 …… 19
第　4　章　まとめ …… 31
付　　論　貝塚市内発見の近世粘土採掘土坑 …… 34

図　版　目　次

図版１　検出遺構
第１区全景
図版２　検出遺構
第２区全景
図版３　検出遺構　第１区
１．第１区　ＳＤ―301
２．同　　上
図版４　検出遺構　第１区
１．第１区　土坑群
２．第１区　ＳＫ―301
図版５　検出遺構　第１区
１．第１区　ＳＤ―302
２．第１区　ＳＥ―301
図版６　検出遺構　第１区・第２区
１．第２区　ＳＫ―124
２．第１区　第３層下面鋤溝群
図版７　検出遺構　第２区
１．第２区　ＳＫ―109
２．第２区　ＳＫ―104、ＳＫ―105
図版８　検出遺構　第２区
１．第２区　ＳＫ―120
２．第２区　ＳＫ―120瓦出土状況
図版９　出土遺物
ＳＫ―120（40、42、45、46）、ＳＫ―124（30、29）
ＳＤ―301（26）、ＳＥ―301（24）出土土器
図版10　出土遺物
包含層第２層（57）、第３層（59、68、72、76、78、86）、
第４層（98、102）出土土器
図版11　出土遺物
青花・白磁・青磁
図版12　出土遺物
白磁・青磁・有舌尖頭器

挿　図　目　次

図１　貝塚市遺跡分布図
図２　調査地位置図
図３　調査区地区割図
図４　基本土層柱状図
図５　第１層下面遺構配置図
図６　第３層下面遺構配置図
図７　地山上面遺構配置図
図８　粘土採掘坑断面図
図９　ＳＫ―120瓦出土状況
図10　ＳＫ―124
図11　ＳＤ―301・302断面図
図12　ＳＫ―301～314断面図
図13　ＳＥ―301
図14　ＳＫ―102（１）、ＳＫ―104（2・4・5）、ＳＫ―103（３）、ＳＫ―106（６）、ＳＫ―107（７～10）、ＳＫ―108（11・12）、ＳＫ―109（13～15）、ＳＫ―115（16・17）、ＳＫ111（18～23）、ＳＥ―301（24）、ＳＤ―301（25・26）、ＳＫ― 124（27～30）出土遺物
図15　ＳＫ―118（31）、ＳＫ―119（32～36）、ＳＫ―120（37～47）出土遺物
図16　包含層第２層出土遺物
図17　包含層第３層出土遺物
図18　包含層第４層出土遺物
図19　白磁・青磁
図20　青花
図21　瓦
図22　粘土採掘土坑検出地点
図23　加治・神前・畠中遺跡
図24　津田遺跡
図25　東遺跡

第１章　調査に至る経過

大阪府貝塚市加神他地内に所在する旧貝塚市立公民館、貝塚市立市民体育館、貝塚市立青少年センター等の跡地内、約6,000㎡の敷地内に、共同住宅の建設計画が平成６～８年度事業としてもちあがり、貝塚市役所総務部庶務課、住宅・都市整備公団より埋蔵文化財の取り扱いについて協議の申し入れがあった。

建設予定地は、周知の遺跡、加治・神前・畠中遺跡の北端部にあたり、従前の発掘では遺跡の状況が不明確な地域であった。しかし、開発面積が膨大であり、周辺の確認調査において遺物包含層を確認していることから、中世等の遺構が存在していることは十分推定できる地域であった。

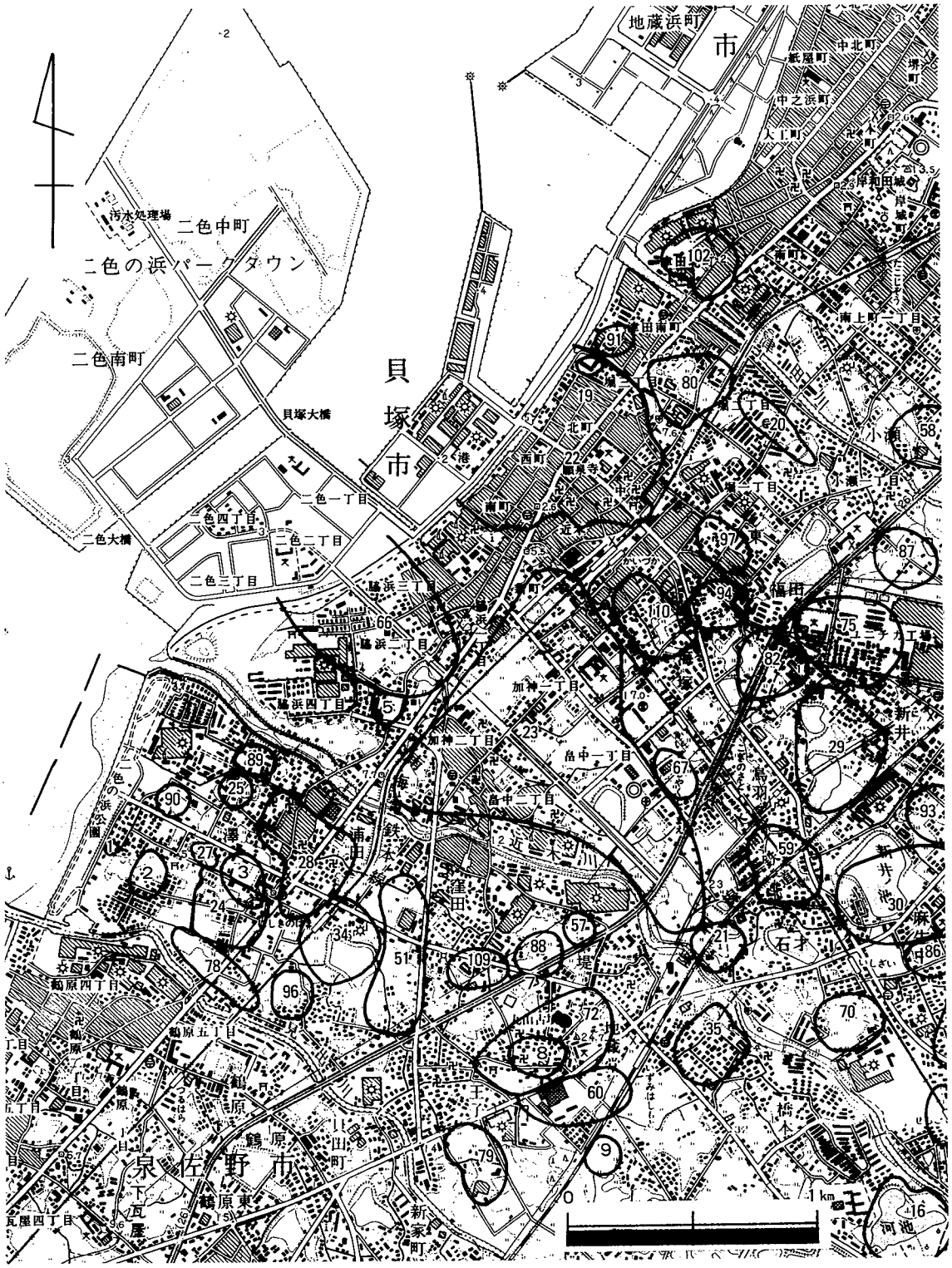
そこで、庶務課と貝塚市教育委員会との間で協議を重ねた結果、開発地内において事前に確認調査を実施した上で、遺構等の存在が明らかとなった場合、発掘調査を実施するとの合意をみた。

確認調査は開発計画にもとづき、開発地内に９ヶ所の調査トレンチ（面積210㎡）を設定し、平成６年10月11日から10月15日にかけて実施した。調査前の状況では、敷地内に多数の建物が建設されており、既設の建物によって大幅に削平されていることが予想されたが、調査の結果、破壊は少ないことが判明し、開発地の北半分では中世の遺物包含層が良好に存在し、南半分では近世の粘土採掘土坑が存在することが明らかとなった。

開発地は一部周知の遺跡外になるため、遺跡範囲拡大の必要から、遺跡発見通知書の提出を求め、遺跡範囲を北東側に拡大した。

確認調査の結果をもとに、再度、開発計画と遺跡の取り扱いについて協議を開始した。開発地のほぼ全域において掘削工事がおよび、現状保存は不可能であることが判明した。そこで、遺跡の取り扱いについて協議を重ねた結果、開発行為によって遺跡を破壊する約5,250㎡について発掘調査を実施することの合意を得た。

発掘調査は平成７年４月３日から11月17日にかけて実施した。調査は開発計画や掘削土の関係から２分割し、北半分を第１区とし、南半分を第２区とした。第１区の掘削土を第２区部分に仮置きし、その後場外搬出し、第１区終了後第２区の調査に着手した。



1.沢新出遺跡　2.沢海岸遺跡　3.沢遺跡　5.長楽寺跡　7.丸山古墳　8.地蔵堂廃寺　9.下新出遺跡　16.河池遺跡　19.泉州麻生塩壺出土地　20.堀遺跡　21.橋本遺跡　22.貝塚寺内町遺跡　23.加治・神前・畠中遺跡　24.明楽寺跡　25.沢共同墓地遺跡　27.沢海岸北遺跡　28.沢城跡　29.新井・鳥羽遺跡　30.新井ノ池遺跡　34.澱池遺跡　35.積善寺城跡　51.窪田遺跡・窪田廃寺　57.堤遺跡　58.小瀬五所山遺跡　59.石才遺跡　60.王子遺跡　66.脇浜遺跡　67.今池遺跡　70.石才南遺跡　72.地蔵堂遺跡　75.新井・鳥羽北遺跡　78.沢西遺跡　79.王子西遺跡　80.津田遺跡　82.福田遺跡　86.麻生中出口遺跡　87.小瀬遺跡　88.堤三宅遺跡　89.沢新開遺跡　90.沢タナジリ遺跡　91.堀新遺跡　93.麻生中下代遺跡　94.堀秋毛遺跡　96.沢老ノ塚遺跡　97.東遺跡　102.津田北遺跡　109.窪田ハマデ遺跡　110.海塚遺跡

図1.　貝塚市遺跡分布図

第２章　位置と環境

加治・神前・畠中遺跡は近木川右岸の段丘上に位置し、南北1400ｍ、東西1100ｍに及ぶ弥生～中世の集落跡である。遺跡の周辺には、北側に縄文から近世にかけての生産遺跡である脇浜遺跡や願泉寺を中心に寺内町として栄えた貝塚寺内町遺跡の他に、堀新遺跡、津田遺跡などが存在する。また、西側から南側・東側にかけては戦国時代の城跡である沢城跡、平安時代の寺院跡である明楽寺跡の他、澱池遺跡、窪田遺跡・窪田廃寺、市域唯一の前方後円墳である丸山古墳、王子遺跡、地蔵堂遺跡、積善寺城跡、石才遺跡、新井鳥羽遺跡、福田遺跡などが広がり、周囲を取り囲んだ形となっている。

加治・神前・畠中遺跡周辺の遺跡で最も古い遺構例は縄文時代のものである。縄文時代以前については旧石器が数点採取されているが、明確な遺構として検出した例は無い。縄文時代の遺構としては、1985年度に大阪府埋蔵文化財協会の行なった脇浜遺跡の調査において、縄文晩期の流路が検出されている。弥生時代には明確な遺構は見つかっていない。ただ弥生土器等の遺物は各遺跡で出土しており、周囲に弥生時代の集落が存在したことは明らかである。古墳時代になると丸山古墳を中心に、いくつかの埋没古墳が確認されているほか、大阪府埋蔵文化財協会の調査で竪穴式住居や掘立柱建物等の住居跡も検出されている。飛鳥～奈良時代、平安時代にかけては、調査区の南側、貝塚市役所周辺の調査において掘立柱建物や溝、井戸等の遺構を検出し、この辺りが集落の中心となっていたと思われる。また、奈良時代の秦廃寺を始めとして平安時代の寺院

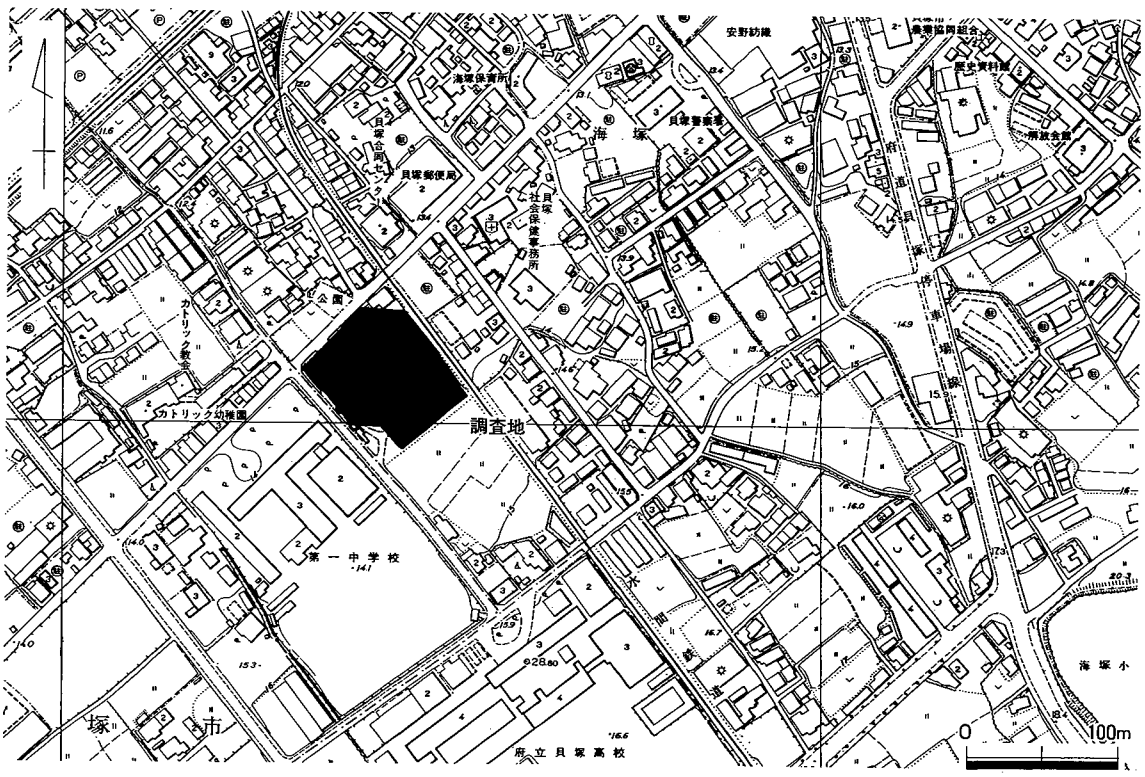


図２．　調査地位置図

も建立され始める。中世になると周辺は耕作地として開発され、普遍的に鋤溝等の遺構を検出する。調査区も近義庄の近木里に比定されており、中世近義庄に組み込まれていた。またコモ池の西側や窪田遺跡・窪田廃寺、王子遺跡、澱池遺跡等で掘立柱建物も検出している。近世になると願泉寺を中心として寺内町が誕生する。貝塚寺内町遺跡では最近の調査により堀の様子も解明されつつあり、また海岸線を限る土塁状の遺構も検出している。街道も整備され、津田遺跡には紀州街道沿いに築かれた陶器窯が存在し、明治まで創業していた。これらの陶器片が多数出土したのが堀新遺跡である。

このように調査区周辺では各時代を通じて多数の遺構を検出している場所であり、試掘調査の結果等により、江戸時代以降の粘土採掘坑や中世の耕作跡、溝等の遺構を検出できるものと想定して調査を開始した。

第３章　調査成果

１．調査概要

調査地は加治・神前・畠中遺跡の東端に位置している。調査に先立ち、９ヶ所の試掘調査を行った結果、中世の包含層が良好に残り、中・近世を中心とした遺構が存在することが明らかとなり、調査を行なうこととなった。

調査は開発計画に沿って5245㎡の調査区を設定し、2778㎡を第１区、2467㎡を第２区として２回に分割し、第１区は４月～７月、第２区は８月～11月にかけて調査した。調査区は国家座標に基づき、５ｍ×５ｍの区画を設け、北から１～19、東からＡ～Ｖの番号を与えた（図３）。調査は盛土、現代耕土までを機械で掘削し、以下人力によって掘り下げた。

調査地には既設建物として、中央公民館、体育館等があり、その基礎等によって多くが破壊されていたが、良好に残っている部分で調査を行なった。遺構検出は第４層、地山上面にて行い、両面全体において遺構を検出した。

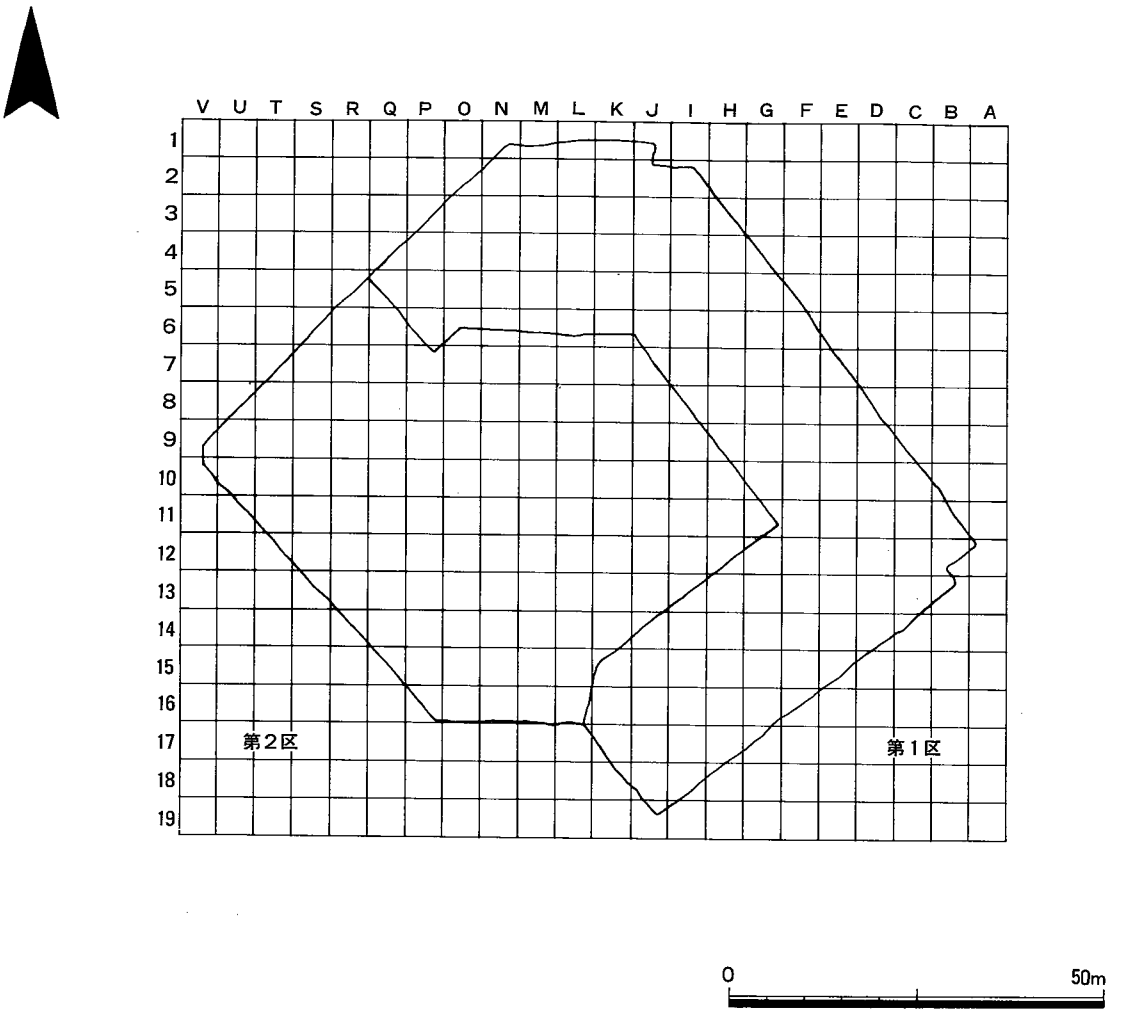


図３．　調査区地区割図

2．基本層序（図４）

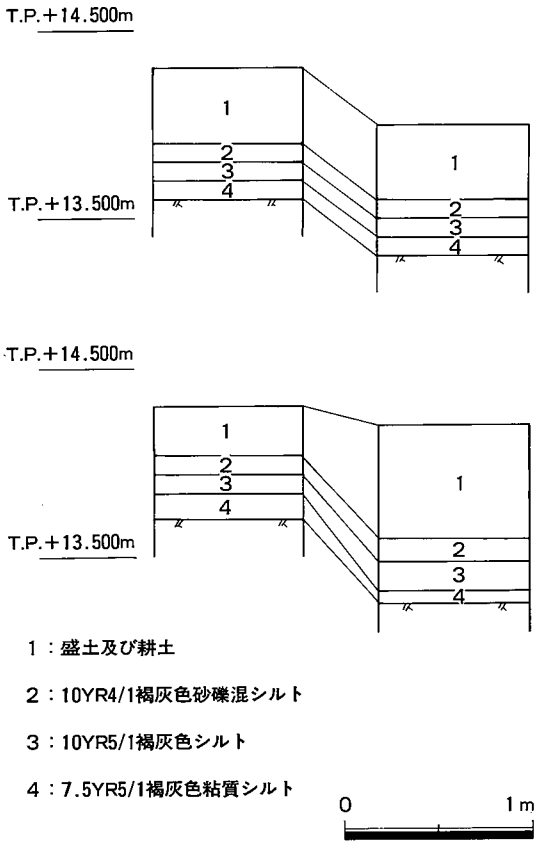


図４．　基本土層柱状図

調査区の基本層序は大まかに４層に分層できる。第１層は盛土であり、第２層から以下包含層となる。地山は現地表下約１ｍで検出している。地山のレベルはＴ.Ｐ.－13.200～13.700ｍで南東から北西に向かって低くなっている。現状地盤のレベルはＴ.Ｐ.－13.900～14.300ｍ、同様に南東～北西に向かって低くなる。以下各層について詳細な説明を行なうことにする。

第１層；現代の盛土と耕土である。層厚約40～70㎝を測る。中央公民館、体育館建設の際に造成されたものと思われる。粘土採掘坑は本層を取り除いた段階で検出している。

第２層；10ＹＲ4／1褐灰色砂礫混シルトである。層厚15～20㎝を測る。遺物は瓦器、土師器、須恵器が出土している。下面には踏み込み痕等が若干認められる。おそらく耕作土であると考えられる。

第３層；10ＹＲ5／1褐灰色シルトである。層厚約10～15㎝を測る。遺物は瓦器、土師器、須恵器が出土している。瓦器は勝浦氏の和泉瓦器編年のⅢ期にあたるものが多く、13世紀の時期が与えられる。下面からは鋤溝が認められ、耕作土であると考えられる。

第４層；7.5ＹＲ5／1褐灰色粘質シルトである。調査区の北東に堆積する。層厚約10㎝を測る。遺物は、瓦器、土師器、須恵器、石鏃が出土している。本層は後述する流路ＳＤ－301の上面を覆うように検出された。おそらく流路が埋まった後、窪んだ面に堆積した層と考えられる。

地山は調査区中央部は黄色粘土であるが、一部西側一帯に灰色砂礫土の層が堆積する。

3．検出遺構（図５・６・７、図版１・２）

遺構は調査区全面で、近世の粘土採掘坑・井戸・杭跡、中世の耕作跡、溝ＳＤ－302、古墳時代の流路、土坑群、弥生時代の井戸ＳＥ－301等を検出した。調査は第３層を人力で掘り下げた後、第４層上面と地山上面で行なったが、厳密に分類すると第１層下面遺構；粘土採掘坑、井戸ＳＫ－124（図５）、第３層下面遺構；鋤溝（図６）、地山上面遺構；ＳＤ－302、流路、土坑群、井戸ＳＥ－301（図７）に分けられる。調査区の南西部では、盛土・現代耕土の下から近世の粘土採掘が行なわれたために包含層や近世以前の遺構は存在しない。他の地区では中世の鋤溝が全面に存在し、東側一帯には古墳時代の流路とその脇に土坑群が存在する。弥生時代の井戸は流路を掘り下げた後に検出した。以下主な遺構について詳述する。

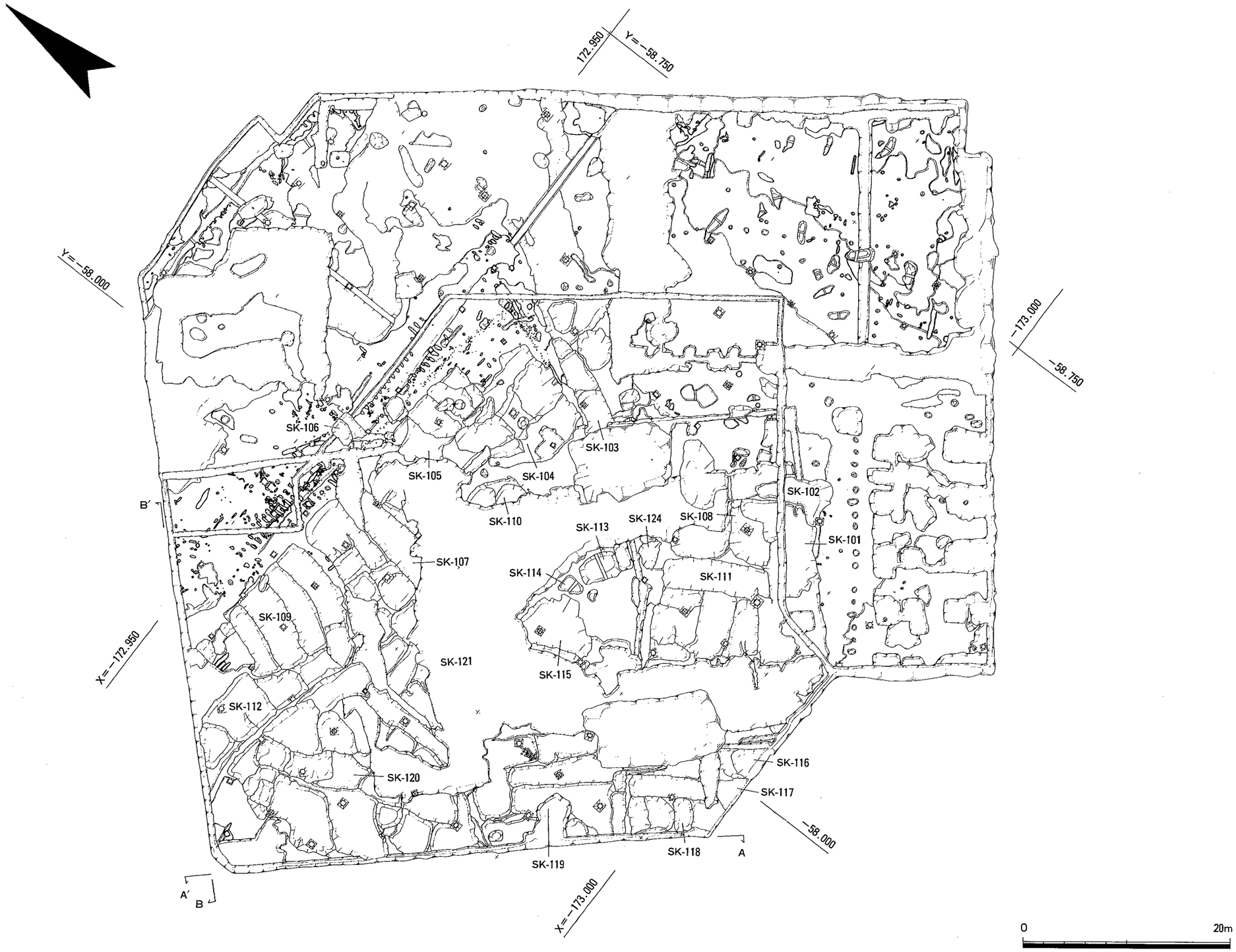


図5． 第1層下面遺構配置図

図6．　第3層下面遺構配置図

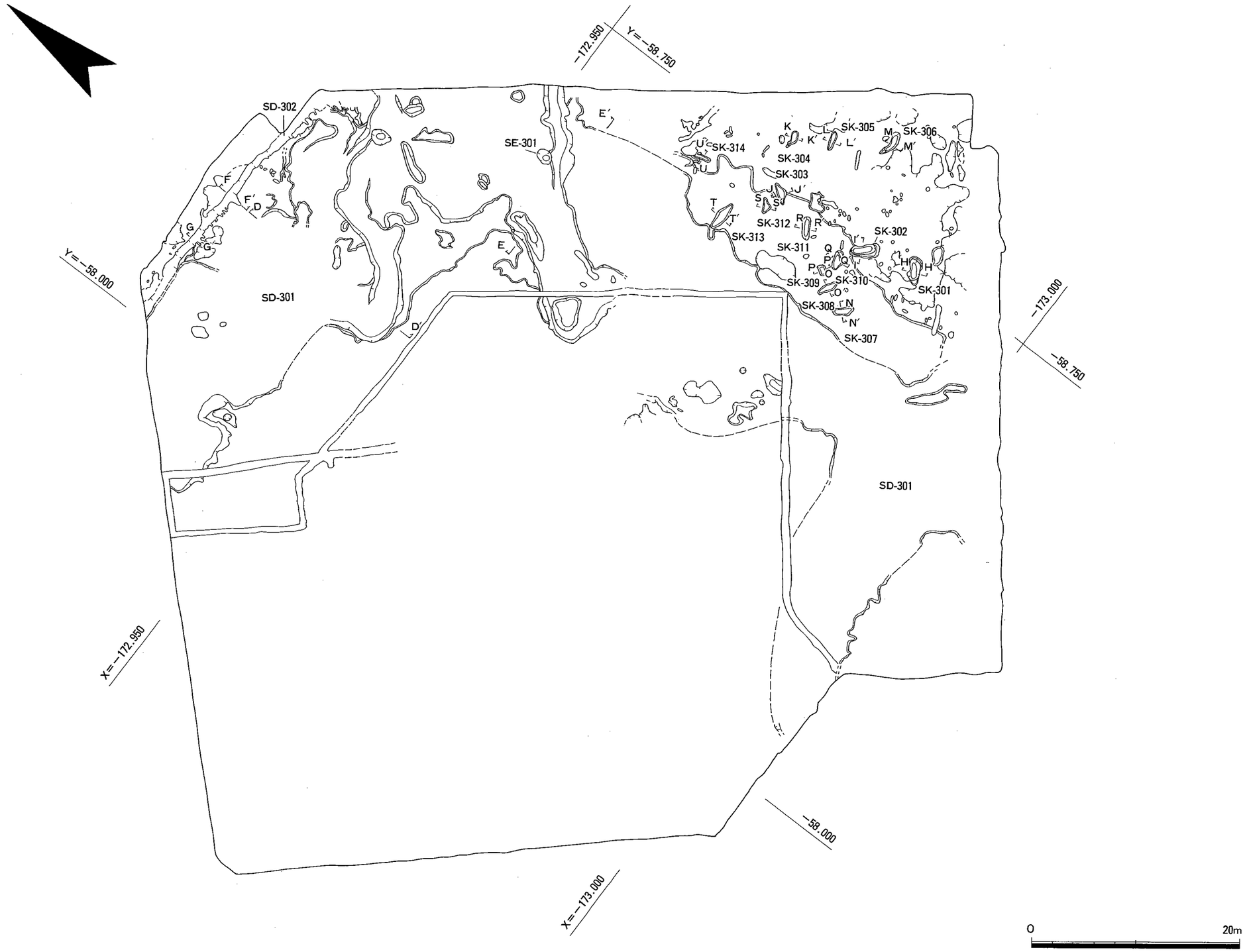
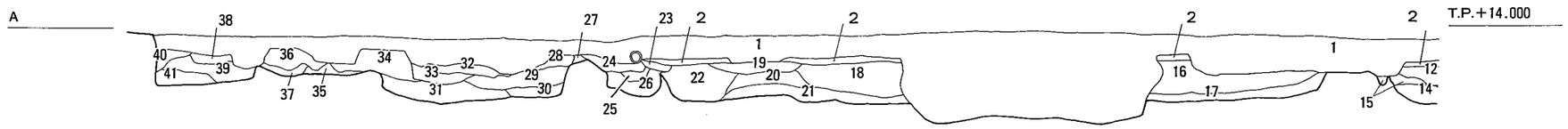
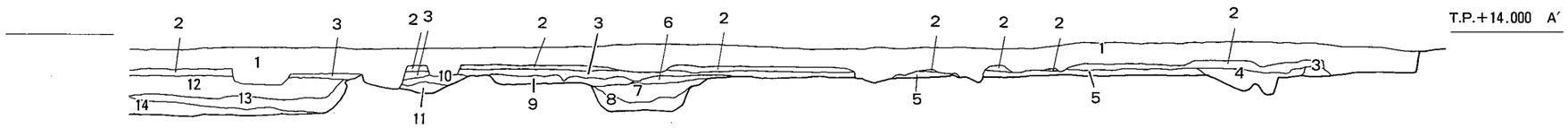


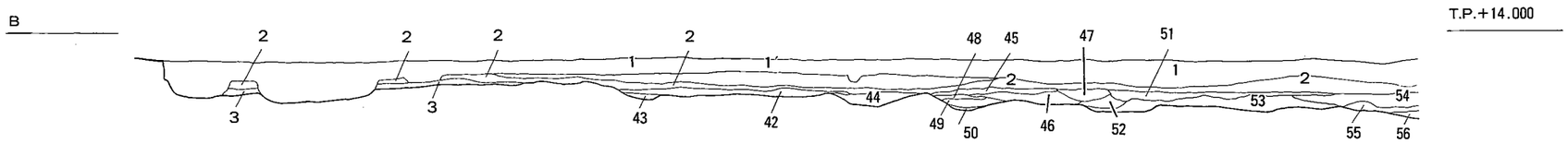
図7． 地山上面遺構配置図



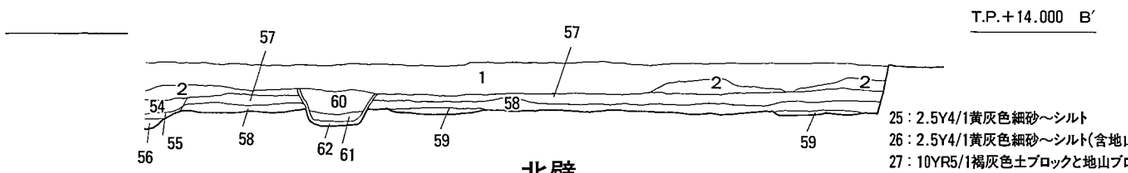
西壁



西壁



北壁



北壁

1：盛土
1′：コークス
2：現代耕土
3：10YR4/2灰黄褐色シルト
4：7.5YR4/1褐灰色砂礫含シルト
5：2.5Y4/1黄灰色シルト(含２～３㎝大の地山ブロック)
6：2.5Y4/1黄灰色シルト(含３～５㎝大の地山ブロック少量)
7：10YR4/1褐灰色シルト
8：2.5Y5/1黄灰色砂質土ブロックと地山ブロックの混在土
9：10YR4/1褐灰色シルトブロックと地山ブロックの混在土
10：7.5YR4/1褐灰色砂礫混土(含地山ブロック)
11：10YR4/1褐灰色砂礫混土

SK-120
12：7.5YR4/1褐灰色土(含５㎝大の地山ブロック)
13：7.5YR4/1褐灰色土
14：10YR4/1褐灰色土(含10㎝大の地山ブロック)
15：7.5YR4/1褐灰色砂質土

SK-120
16：10YR4/1褐灰色砂礫混土
17：N4/0灰色細砂～シルト(含地山ブロック多量)
18：10YR4/1褐灰色極細砂～シルト
19：7.5YR4/1褐灰色土
20：2.5Y4/1黄灰色粘質土(含地山ブロック少量)
21：N4/0灰色細砂～シルト(３～５㎝大の地山ブロック多量)
22：10YR4/1褐灰色粘質土(含地山・包含層ブロック)
23：2.5Y4/1黄灰色土
24：10YR4/1褐灰色砂礫混土

SK-119
25：2.5Y4/1黄灰色細砂～シルト
26：2.5Y4/1黄灰色細砂～シルト(含地山ブロック)

SK-118
27：10YR5/1褐灰色土ブロックと地山ブロック混在土
28：10YR4/1褐灰色土
29：2.5Y4/1黄灰色極細砂～シルト(含地山・包含層ブロック)
30：2.5Y4/1黄灰色極細砂(含地山ブロック)
31：2.5Y4/1砂礫混土(含包含層ブロック)
32：10YR4/1褐灰色土
33：2.5Y4/1黄灰色砂礫混土
34：10YR4/1褐灰色極細砂～シルト
35：2.5Y4/1黄灰色砂礫混土
36：10YR4/1褐灰色土
37：2.5Y5/1黄灰色粘質土ブロックと地山ブロックの混在土
38：10YR4/1褐灰色砂質土
39：10YR4/1褐灰色極細砂(含３㎝大の地山ブロック多量)
40：7.5YR4/1褐灰色土
41：7.5YR4/1褐灰色土(含地山ブロック)

SK-119
53：2.5Y4/1黄灰色砂礫混土
54：2.5Y4/1黄灰色極細砂～シルト

SK-112
42：10YR5/1褐灰色砂質シルト
43：7.5YR4/2灰褐色シルト
44：2.5Y4/1黄灰色砂礫混土
45：2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト
46：2.5Y4/1黄灰色砂礫混土
47：10YR4/1褐灰色土
48：10YR4/1褐灰色土(含地山ブロック少量)
49：2.5Y5/1黄灰色砂礫混土
50：7.5YR5/1砂質シルト(含２～３㎝大の地山ブロック多量)
51：2.5Y5/2暗灰黄色土(含地山ブロック少量)
52：7.5YR4/1褐灰色土(含地山ブロック)
55：10YR4/1褐灰色土
56：2.5Y4/1黄灰色粘質土

57：10YR4/1褐灰色砂礫混シルト＝第２層
58：10YR5/1褐灰色シルト＝第３層
59：7.5YR4/1褐灰色粘質土
60：N4/0灰色シルト
61：2.5Y6/8明黄褐色砂礫混粘質土
SK-118 62：N2/0黒色極細砂～シルト

0　2m

図８．　粘土採掘坑断面図(２区・西壁、北壁)

粘土採掘坑　ＳＫ－101～121（図５・８・９、図版７・８）

本遺構は第１層下面で検出した土坑である。調査区の南西部一帯に広がっている。遺構検出段階では便宜上径約10～20ｍの不整形の土坑群を21に分けた。しかし掘り進めると、底面では幅２～３ｍ、長さ２～10ｍの長方形を一単位として採掘を行なった跡が伺え、何度か粘土採掘を行なった結果、このような不整形の土坑状を呈したものと考えられた。深さは15㎝程の浅い部分もあるが、概ね約50㎝から１ｍでかなり深く掘り込まれている。埋土は褐灰色もしくは黄灰色のシルト層に地山の黄色粘土や、第３、４層包含層のブロックを含んでいる。最下層には所々に灰色の粘土層が堆積し、水が溜まったような状況を見せる部分もあるが、粘土採掘後、それ程の時間をおくこと無く、周囲の粘土採掘を進めながら埋め戻しを行なったものと考えられる。また、採掘は地山が粘土質の部分にのみ広がっており、おそらく一定方向に粘土を探り当てるような形で行なわれたものと考えられる。ＳＫ－104は地山に褐灰色シルトブロックが少量堆積する程度でほとんど採掘を行なった形跡が見られない。ＳＫ－104付近の地山は灰白色の砂礫層で粘土採掘のため掘り起こしたが、粘土が見つからなかったために、すぐ埋め戻したものと思われる。また何度か方向を違えて掘削し直す事もしており、ＳＫ－120の一部では一単位の長方形の方向が乱れる部分がある。

遺物はそれ程多くはないが陶器、磁器を中心に、おそらく一緒に採掘した包含層の遺物と考えられる瓦器、土師器、須恵器等も含んでいる。陶磁器は16世紀の唐津皿等から18世紀後半のものが出土している。肥前磁器は梅樹文やコンニャク印判を押した丸碗の出土が目立つ。二重網目文碗、筒型碗、青磁染付碗は存在するが、広東碗は存在しない等の理由から18世紀中頃～後半を中

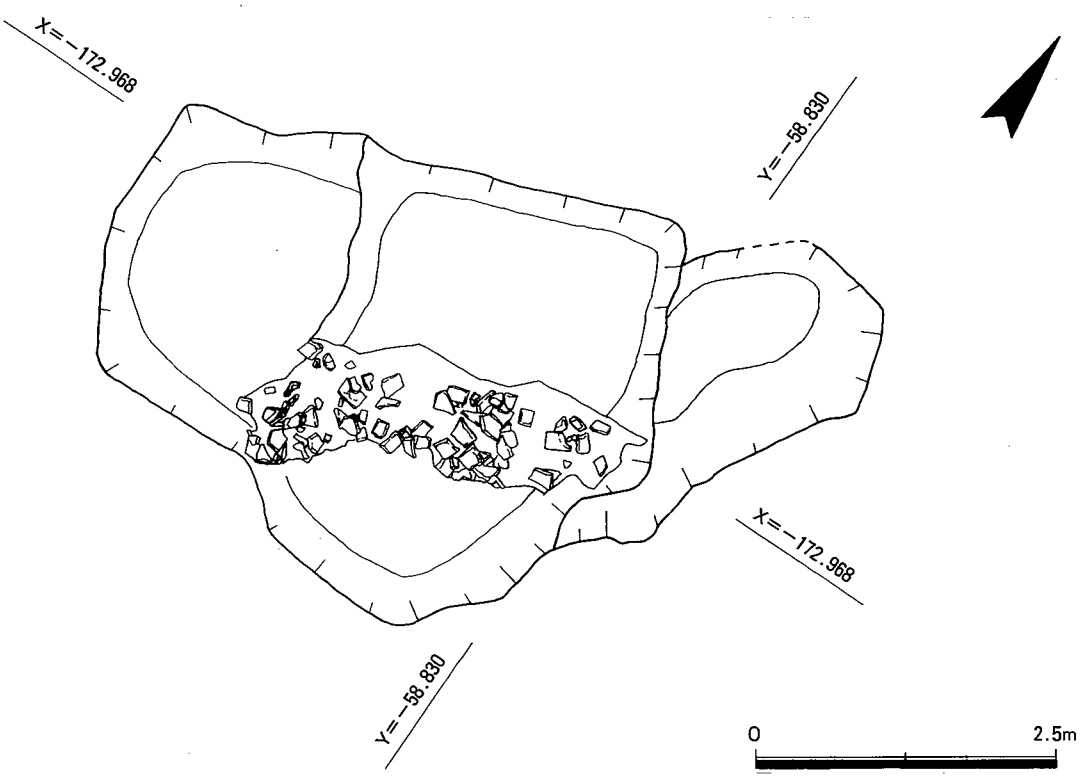


図９．　SK-120瓦出土状況

心として掘削されたものと考える。また、ＳＫ－120の底面から瓦が一括して出土している。瓦はＴ－９、Ｓ－10区に分散しており、出土したレベルは一定ではない。瓦には火を受けた痕跡があり、周辺には焼土や炭片等が広がっている。おそらく粘土採掘後一括して廃棄したものと思われる。

このように粘土採掘は計画的尚且つ大規模なものであったと考えられる。こうした大規模な掘削はおそらく政治的に大きな力が働いていた可能性が高い。堺環濠都市遺跡では環濠都市をめぐる周辺の遺跡でこのような大規模な粘土採掘が行なわれている。貝塚市にも調査地から北へ500ｍの所に貝塚寺内町遺跡が存在する。本遺構はこの寺内町と大きな関係をもつものと考えられる。

ＳＫ－124（図５・10、図版６）

本遺構はＬ－12区の第１層下面で検出した素掘りの井戸である。長軸2.5ｍ、南西幅1.8ｍ、北東幅2.1ｍで、北東側が幅広い隅丸二等辺三角形状を呈す。深さは約３ｍで、埋土は上層より１；地山と褐灰色シルトブロックの混在土、２；黄灰色シルト・青灰色極細砂・青灰色粘土の混在土、３；青灰色砂礫混粘土と黄灰色粘質シルトの混在土の順に堆積し、湧水層に達する。第２層と第３層は水を含み、ねばねばして締まりが悪く、第１層は１㎝大の砂礫を含んで固く締まっている。いずれの層もブロック等を含み、埋土の中には、竹節状の有機質の小片が認められるため、使用後祭祀を取り行ない、埋め戻したものと考えられる。遺物は土師器、陶磁器等が出土している。本遺構の上面には凹地に堆積したと思われる粘土採掘坑の埋土が堆積しており、したがって本遺構の時期は粘土採掘坑より古く、本遺構が埋め戻された後に粘土採掘が行なわれたものと考えられる。

鋤溝群（図６、図版６）

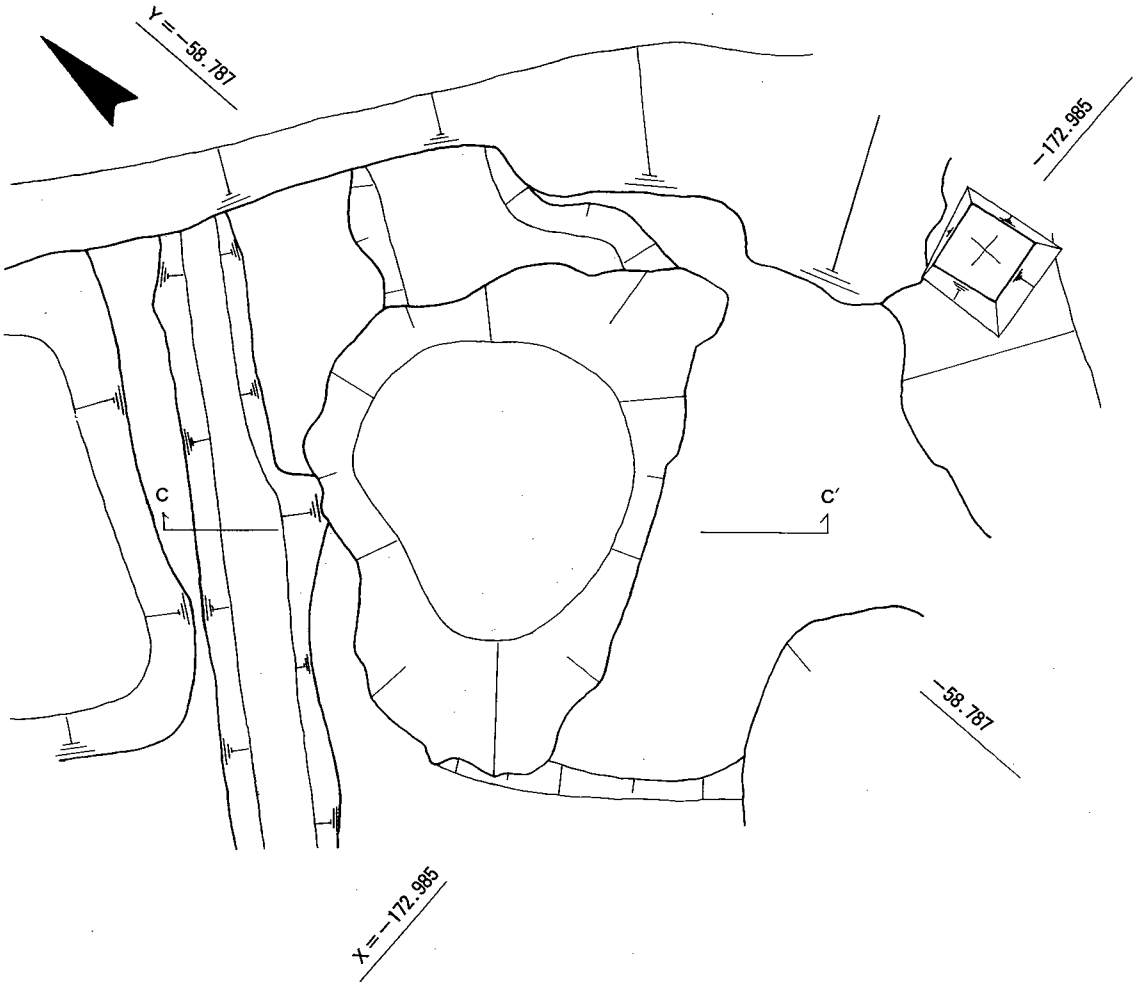
本遺構は第３層下面で検出した鋤溝群である。調査区全面に存在する。いずれも幅15～20㎝、深さ３～15㎝の小溝である。ほぼ南北方向のものと、西へ約45°振る方向のものがある。南北方向は南側、西に振るものは北側に集中する。埋土は10ＹＲ5／1褐灰色シルト（第３層）で、瓦器、土師器が出土した。第３層耕作に伴う遺構と考えられ、13世紀代のものである。

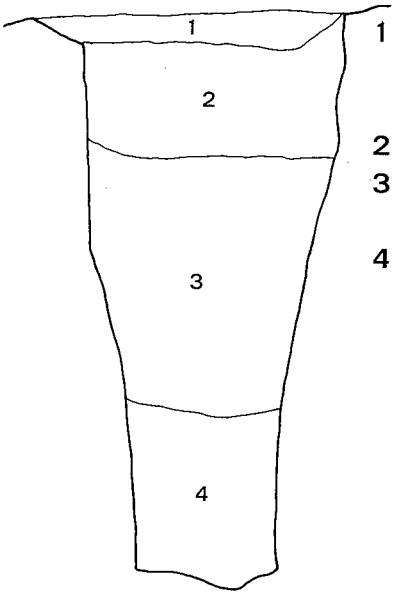
ＳＤ—302（図７・11、図版５）

本遺構は地山上面で検出した溝で、Ｊ～Ｎ－１～２区に位置する。ＳＤ—301が埋まった後掘られたもので、ほぼ東西方向にのびる溝である。幅約60～70㎝、深さは約10㎝で断面Ｕ字形を呈しており、東～西に向かって流れている。埋土は上層が褐灰色シルト、下層は褐灰色粘質シルトである。遺物は出土していない。

ＳＤ—301（図７・11、図版３）

本遺構は地山上面で検出した自然流路である。調査区東側一帯に広がり、幅約13～20ｍで南か





1：褐灰色シルト
（含黄色粘土ブロック）
＝粘土採掘坑埋土
2：黄色粘土、褐灰色砂質シルトブロックの混在土
3：黄灰色粘質シルト、青灰色極細砂
青灰色粘土の混在土
4：青灰色砂礫混粘土と黄灰色粘質シルトの混在土

図10. SK-124

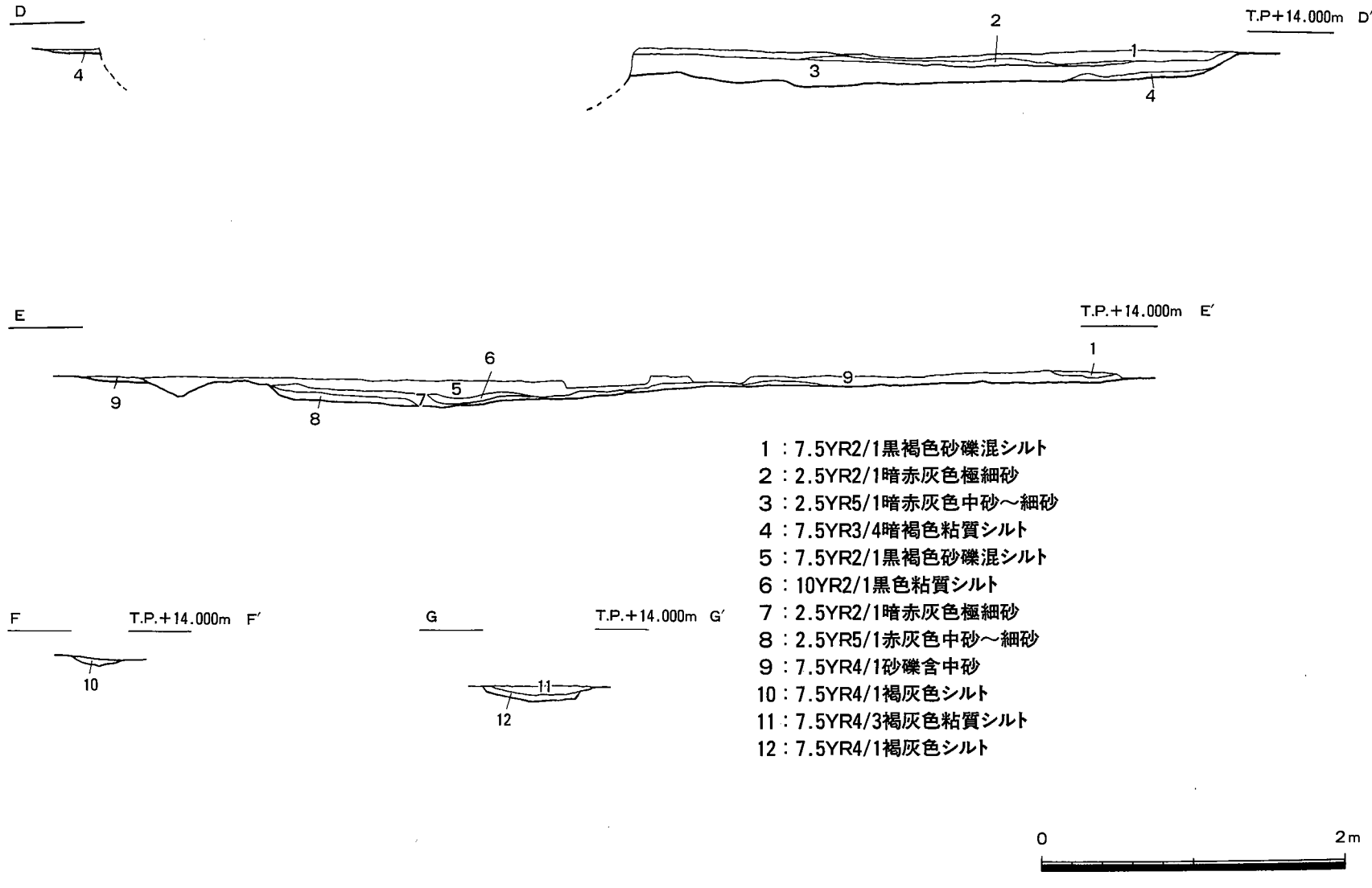


図11. SD-301・302断面図

ら大きく蛇行しながら北にむかって流れている。深さは約15～45㎝で浅い流路である。埋土は一部最下層に粘質シルト層が堆積する箇所があるが、概ね、下層に暗灰色か赤灰色の砂礫層及び砂質シルトが堆積し、上層に同色のシルト層が堆積している状況である。ブロック等は含んでおらず、自然に埋まったものと考えられる。第４層はこの流路が埋まった後、凹地に堆積したものと思われる。遺物は上層から瓦器等が出土し、下層から須恵器杯や土師器が出土している。須恵器は中村浩氏の編年で第Ｉ型式５段階に該当し、５世紀後半の時期が与えられる。なお、本遺構北西部から有舌尖頭器が出土した。

ＳＫ―301～314（図７・12、図版４）

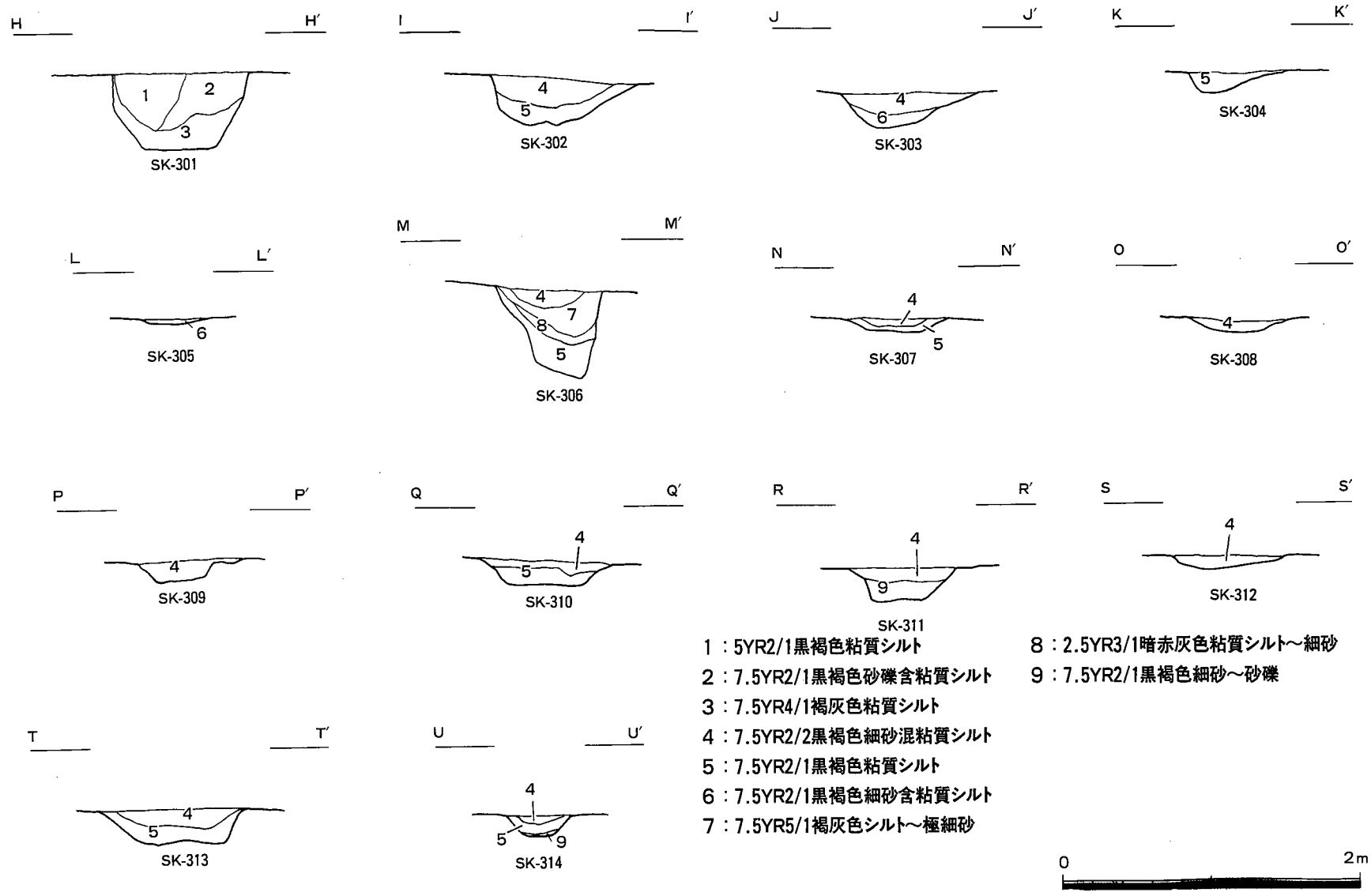
本遺構は地山上面で検出した土坑群でＣ～Ｆ－９～13区に集中する。いずれも長さ約２～３ｍ、幅0.4～１ｍの長楕円形を呈しており、深さは10㎝前後のものから60㎝まで一様でない。また、底面も凹凸があり、内壁を深く抉り込んだものも見られる。土坑の方向は東に35°傾いた南北方向のものと、北に約20°傾いた東西方向のものがある。埋土はいずれも黒褐色細砂含粘質シルトで、出土遺物は無かった。このような形の土坑は、加治・神前・畠中遺跡において、しばしば検出されている。いずれも出土遺物が少なく、その性格については不明と言わざるを得ない。同様の遺構例としては、土坑墓の可能性が考えられるが、埋土の状態や形状、遺物の少なさ等から考えると、人工のものと考えるより自然のものと考えた方が良いのかもしれない。周辺の市域では同様の類例が少なからず報告されている。和泉市の万町北遺跡では本遺構と類似した不定形の土坑が数多く検出されている。これら土坑は地山との境界がはっきりせず、層序の逆転が見られ、担当者は風倒木痕の典型としている。おそらく本遺構も同様に風倒木痕と考えるべきであろう。

ＳＥ―301（図７・13、図版５）

本遺構はＳＤ―301を掘削中、Ｇ－６区、ＳＤ―301の底面より検出した素掘りの井戸である。上面が削平されている可能性が高いが、深さは約１ｍで、東西約1.2ｍ×南北約1.55ｍの不整円形を呈する。埋土は１～５㎜大の砂礫混暗紫褐色粘土で10㎝大の石、木片等も混じっている。底面近くから弥生土器の壺が出土した。加治・神前・畠中遺跡では弥生時代の遺物はしばしば出土するが、当時期の遺構は検出例が無い。他の遺構はＳＤ―301によって削平されている可能性が高いものの、井戸の検出は当調査地に集落が存在していたことを裏付けるものであり、今回重要な発見となった。

４．出土遺物

遺物は各遺構、包含層共に数多く出土した。その内図示し得るのは、粘土採掘坑、ＳＥ―124・301、ＳＤ―301等の遺物が多く、包含層、鋤溝、土坑等の遺物は細片が多いため図示し得るものが少なかった。時代は縄文～近世までの遺物が出土しているが、内容は広範囲に及ぶ粘土採掘坑から出土した陶磁器類が大部分を占め、包含層から出土した中世の瓦器、土師器の碗・皿等の出



1：5YR2/1黒褐色粘質シルト
2：7.5YR2/1黒褐色砂礫含粘質シルト
3：7.5YR4/1褐灰色粘質シルト
4：7.5YR2/2黒褐色細砂混粘質シルト
5：7.5YR2/1黒褐色粘質シルト
6：7.5YR2/1黒褐色細砂含粘質シルト
7：7.5YR5/1褐灰色シルト～極細砂
8：2.5YR3/1暗赤灰色粘質シルト～細砂
9：7.5YR2/1黒褐色細砂～砂礫

図12. SK-301～314断面図

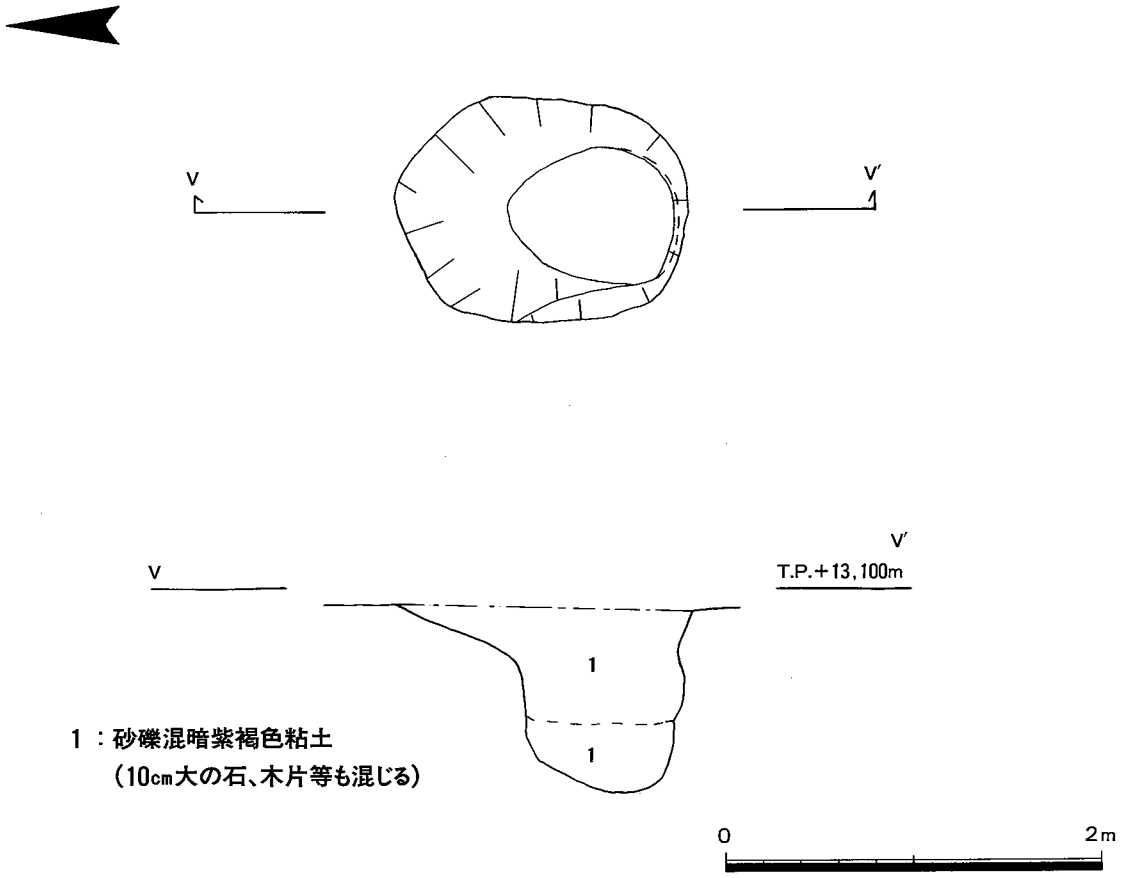


図13.　SE-301

土が目立つ。また、粘土採掘坑や包含層からは当該期の遺物に混じって青磁、白磁、青花等の輸入陶磁器が多く出土しており、中でも13点もの青花の出土は特筆すべきものである。またＳＤ—301から出土した有舌尖頭器については、市内で２例目の発見であるが、ほぼ完全な形での発見としては初めてである。

以下、各遺構・包含層出土の遺物を詳述していくが、各遺物については瓦器／勝浦康守氏、須恵器／中村浩氏、輸入陶磁器／森田勉氏、小野正敏氏の編年・分類を参考にさせていただいた。また、瓦器皿・土師器皿については、口縁部の形態からＡ～Ｅの５タイプに分類した。Ａタイプ／深めの皿で、口縁はゆるく外反するもの。Ｂタイプ／深めの皿で、強いナデによって口縁部がＳ字状を描くもの。Ｃタイプ／浅めの皿で、ナデによる口縁部の立ち上がりが明瞭でなく、まっすぐに近いもの。Ｄタイプ／浅めの皿で、底部よりほぼ垂直に立ち上がり口縁と底部の間にするどい稜線をもつもの。Ｅタイプ／やや深めの皿で、口縁部が内弯するもの。以上の５タイプである。

粘土採掘坑（図14•15、図版９）

１はＳＫ—102から出土した遺物である。須恵器の捏鉢口縁部で、口径35.4cmを測る。２・４・５はＳＫ—104から出土した遺物である。２は土師質土錘である。径1.4cmを測る。４は京焼系陶

器で底径4.6cmを測る。高台裏に銘「森？」がある。５は肥前系磁器碗口縁部で、径9.4cmを測る。口縁外面に波文をめぐらす。

３はＳＫ―103から出土した遺物で、肥前系磁器碗底部である。高台径４cmを測り、文様等は不明である。

６はＳＫ―106出土の遺物で土師器羽釜口縁部である。口径27.4cmを測る。

７～10はＳＫ―107出土の遺物である。７・８は土師質土錘である。それぞれ径１cm、1.4cmを測る。９・10は肥前系磁器である。９の筒型碗は口径8.2cmを測り、外面に菊花文、内面に四方襷文を描く。10は青磁染付碗で、内面に四方襷文を描く。口径11.4cmを測る。

11•12はＳＫ－108出土の遺物である。11は志野で、底径6.8cmを測る。12は瓦器碗で口径14.8cmを測り、内面には口縁端部までミガキを施す。

13～15はＳＫ－109出土の遺物である。13は肥前系磁器皿で、口径10cmを測る。外面に花文を描く。14•15は瓦器碗である。14は底部で、高台径6.4cmを測り、見込み部分に格子文のミガキを施す。15は口縁部で口径13.4cmを測る。内面には輪状文のミガキを施す。16•17はＳＫ－115出土の遺物で、肥前系磁器碗である。16は口径９cmを測り、外面には二重網目文を描く。17は口径10.6cmを測り、外面に松枝文を描く。

18～23はＳＫ－111出土の遺物である。18•19は土師器皿である。18は口径９cmを測り、Ａタイプ、19は口径11cmを測り、Ｅタイプに該当する。20は瓦器碗で、口径15.6cmを測る。21は陶器甕口縁部である。口径は36cmを測る。22は肥前系磁器碗である。口径5.8cmを測る。23は土師質の摺鉢で、口径27.6cmを測る。外面に墨書で「寿」字が書かれている。

31はＳＫ－118出土の遺物で、土師器底部である。底径12cmを測る。

32～36はＳＫ－119出土の遺物である。33は肥前系磁器碗で、口径12.2cmを測る。外面に草花文を描く。34は須恵器杯身である。高台径9.4cmを測る。35•36は陶器で、高台径がそれぞれ4.2cm、５cmを測る。36は見込みに目跡が残っている。

38～47はＳＫ－120出土の遺物である。38は備前壺底部である。底径9.6cmを測る。39•40は唐津である。39は灰釉皿で口径11.8cmを測り、40は鉄絵皿で口径14cmを測る。41•42は肥前系磁器碗である。41は口径11.2cmを測り、外面には草花文を描く。42は口径10cmを測り、外面には梅樹文を描く。43は京焼系陶器で、高台裏に「清水」銘がある。高台径4.6cmを測る。44は素焼きの瓶で高台径2.8cmを測る。45は青磁染付碗で口縁部内面に四方襷文、見込みに五弁花の印判を押している。口径は11.6cmを測る。46•47は堺摺鉢である。46は口径34cmを測る。47は底部で底径16.8cmを測る。

ＳＥ－301（図14、図版９）

24はＳＥ－301出土の遺物で、弥生土器壺底部である。底径7.2cmを測る。２mm前後の砂粒を数多く含み、摩滅により調整は不明である。

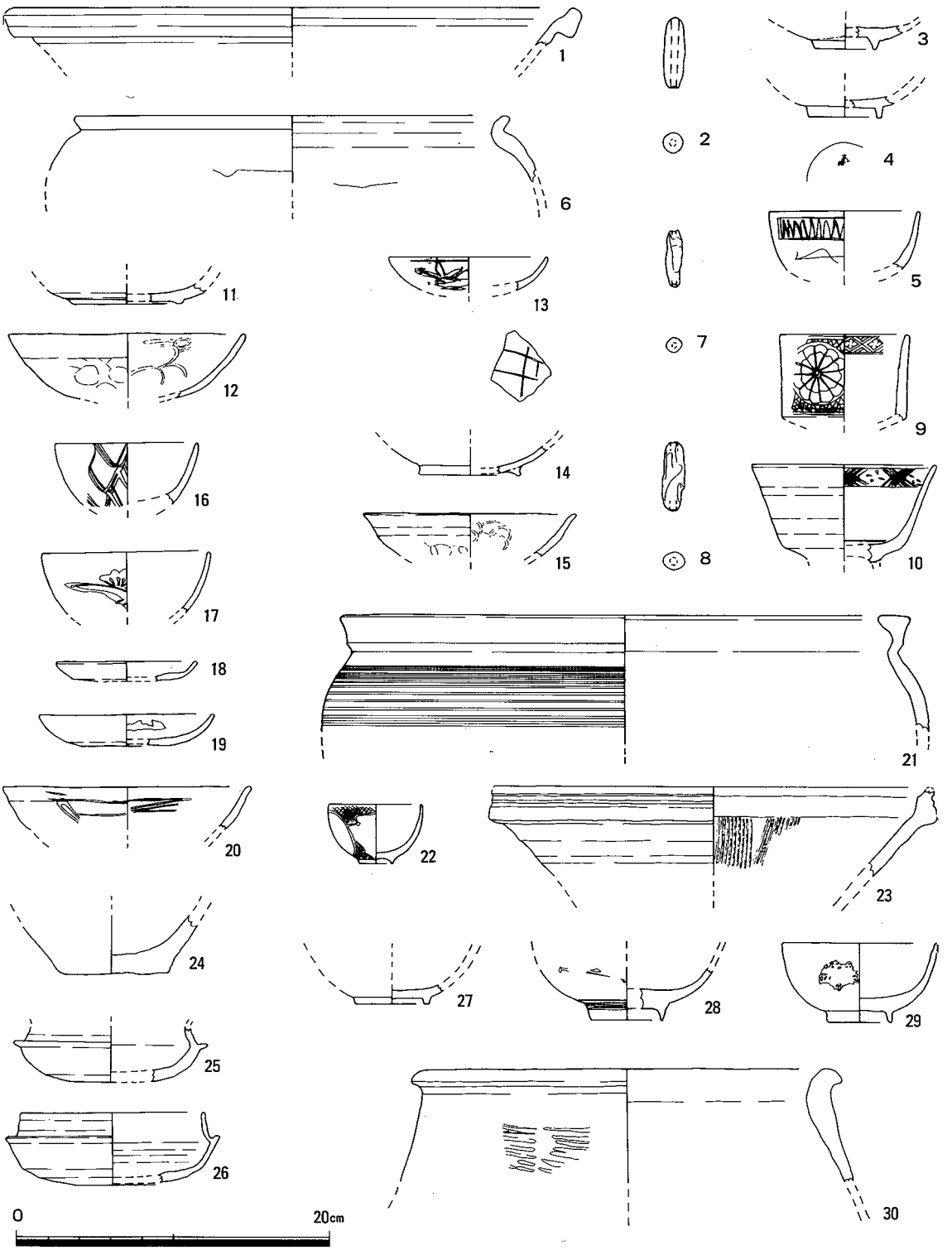


図14. SK-102(1)、SK-104(2、4、5)、SK-103(3)、SK-106(6)、SK-107(7～10)、SK-108(11、12)、SK-109(13～15)、SK-115(16、17)、SK-111(18～23)、SE-301(24)、SD-301(25、26)、SK-124(27～30)出土遺物

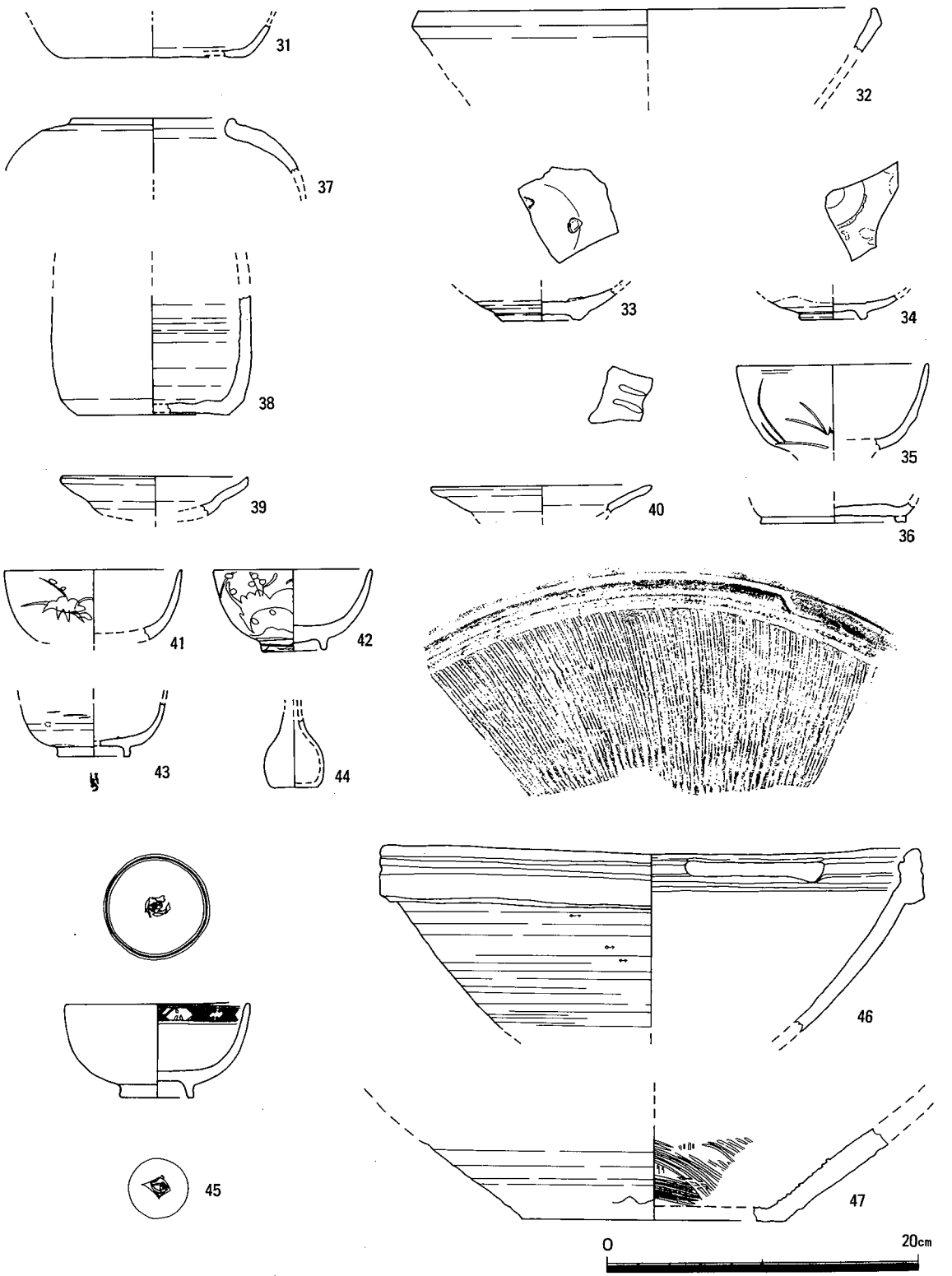


図15.　SK-118(31)、SK-119(32～36)、SK-120(37～47)出土遺物

ＳＤ－301（図14、図版９）

25•26はＳＤ－301出土の遺物で須恵器杯身である。25は口縁端部が欠けているが、10cm前後になるものと思われる。26は口径11.4cmを測る。いずれも第Ｉ型式第５段階に該当する。

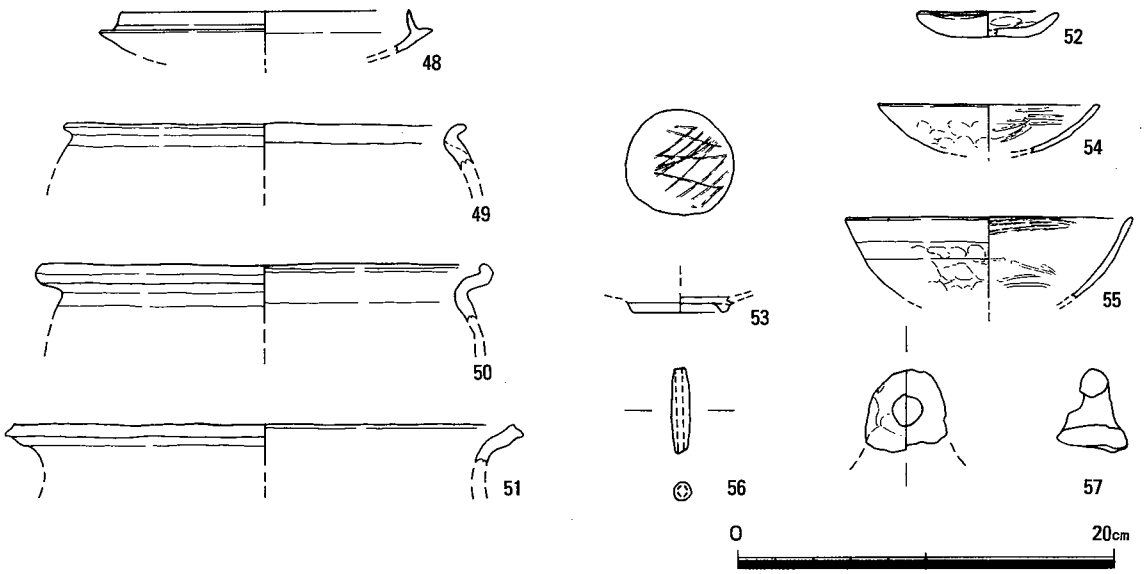


図16.　包含層　第２層出土遺物

ＳＫ－124（図版14、図版９）

27～30はＳＫ－124出土の遺物である。27は京焼系陶器底部で、高台径4.6cmを測る。28•29は肥前系磁器碗である。28は底部で、高台径4.6cmを測る。文様は不明である。29は口径10cmを測り、外面に印判を押している。30は土師器甕である。口径26cmを測り、外面にタタキ目を残す。

包含層第２層（図15、図版10）

48～57は包含層第２層から出土した遺物である。

48は須恵器杯身で、口径15cm、Ⅱ型式５段階に該当する。49～51は土師器羽釜口縁部である。口径は21.2～26.2cmである。52は瓦器皿で、口径7.4cmを測る。53～55は瓦器碗である。53は底部である。内面には格子ミガキを施し、高台径５cmを測る。Ⅱ－３期に該当する。54•55は口縁部である。内面にミガキを施し、口径11.6cm、15cmを測る。Ⅲ期に該当する。56は土師質土錘である。径１cmを測る。57は土師質蛸壺である。

包含層第３層（図17、図版10）

58～94は包含層第３層出土の遺物である。

58は黒色土器Ａ類である。調整は摩滅のため不明である。口径15.6cmを測る。

59～69は瓦器碗である。59～62は口縁部で、口径13.6～17.8cmを測る。内面は端部までミガキを施している。63～69は底部で、高台径4.5～5.5cmを測る。内面見込みに格子文・平行文・輪状文のミガキを施している。瓦器碗はⅢ期に該当するものが多く中心を占め、少量ではあるがⅡ－２・３期に該当するものも含まれる。

70～73は土師器皿で、口径８～10cmを測る。70はＢタイプ、71～73はＤタイプに該当する。

74～80は瓦器皿で、口径7.4～10cmを測る。74•75はＥタイプ、76•77はＡタイプ、78•79はＢタイプ、80はＣタイプに該当する。

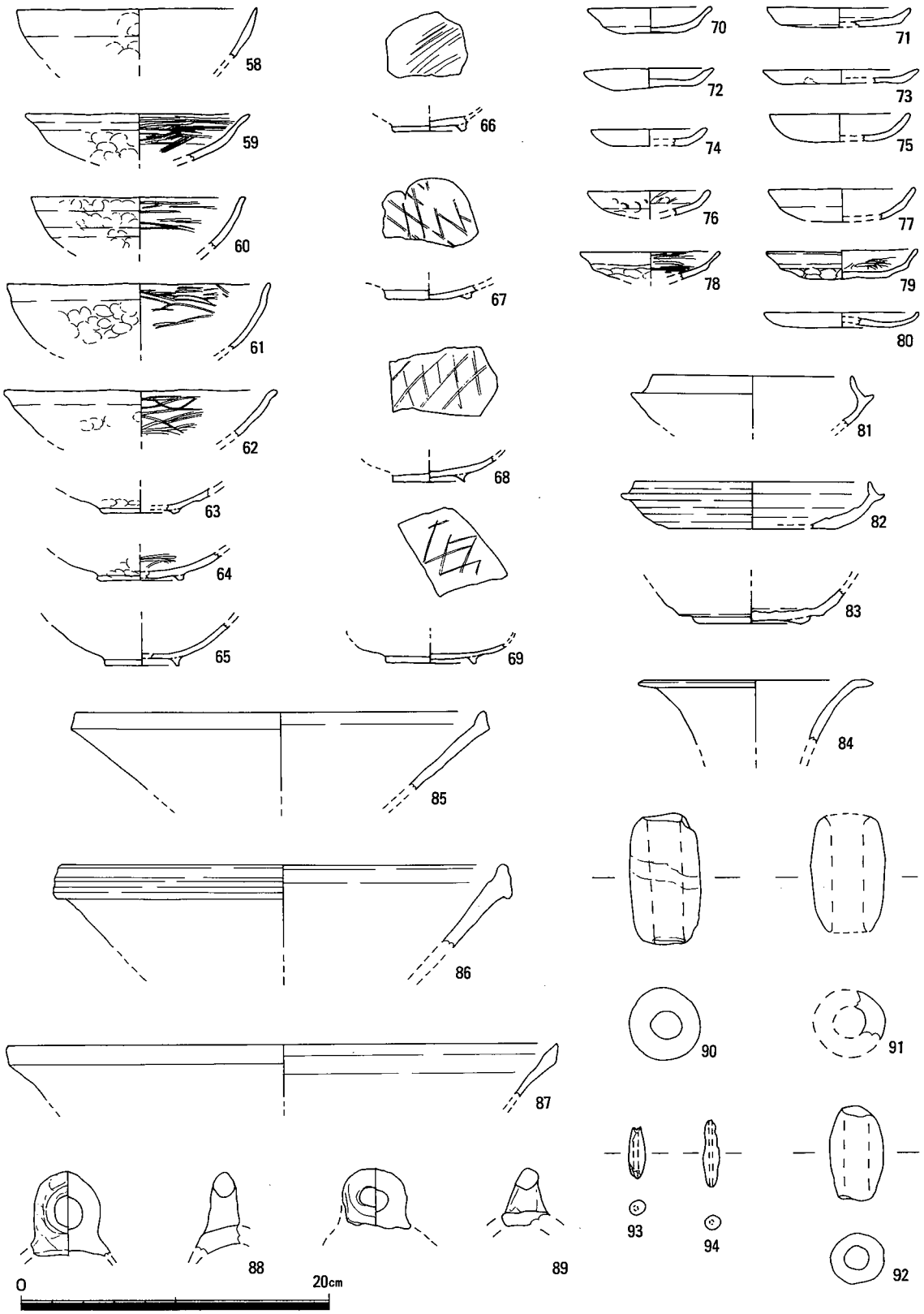


図17.　包含層　第３層出土遺物

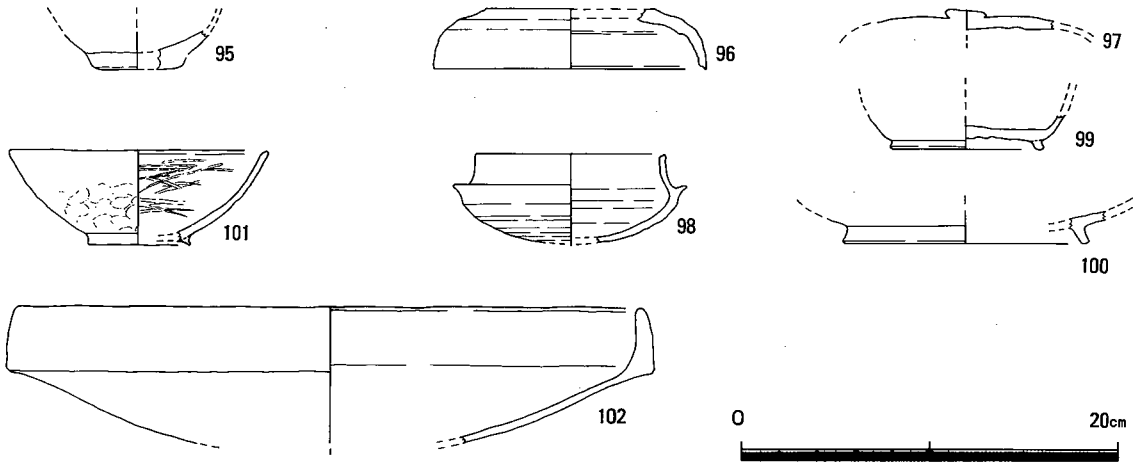


図18.　包含層　第４層出土遺物

81～87は須恵器である。81～83は須恵器杯身である。81・82は口縁部で口径13cm、15.2cmを測る。83は底部で高台径７cmを測る。81はⅡ型式２段階、82はⅡ型式４段階に該当する。84は長頸壺口縁部で、口径14.6cmを測る。85～87は捏鉢口縁部である。口径26.4～35.4cmを測る。

88•89は土師質の蛸壺である。

90～94は土師質の土錘である。90～92は径3.5～4.6cmを測り、93•94は径１cm前後の細いタイプのものである。

包含層第４層（図18、図版10）

95～102は包含層第４層から出土した遺物である。

95は弥生土器壺底部である。底径4.6cmを測る。

96•97は須恵器杯蓋である。96は径14.4cmでⅡ型式３段階に該当し、97はつまみのあるタイプで径は不明、Ⅳ型式に該当する。98～100は須恵器杯身である。98は口径10cmを測り、Ⅰ型式５段階に該当する。99•100は高台を持つタイプで、高台径は99が８cm、100が13cmを測る。

101は瓦器で、口径13.6cmを測る。内面にミガキを施し、Ⅲ－１期に該当する。

102は焙烙である。口径32.8cmを測る。

白磁•青磁（図19•図版11•12）

103～111は白磁である。103～107は碗口縁部である。端部は玉縁状を呈するタイプで、森田勉氏の分類でⅣ期に該当する。口径は15.6～17cmを測る。104はⅨ類のⅢで、口禿げと呼ばれるタイプのものである。口径11.6cmを測る。108～111は碗底部である。108～110は高台の低いタイプで、高台径は5.4～7.2cmを測る。111は高台の高いタイプで、Ⅴ類に該当する。高台径は６cmを測る。

112～116は青磁である。112は碗口縁部で、雷文帯と蓮弁文を施すもの。口径11.8cmを測る。113～116は碗高台部で、高台径５cm前後を測る。115•116は胴部外面に蓮弁文が施されている。

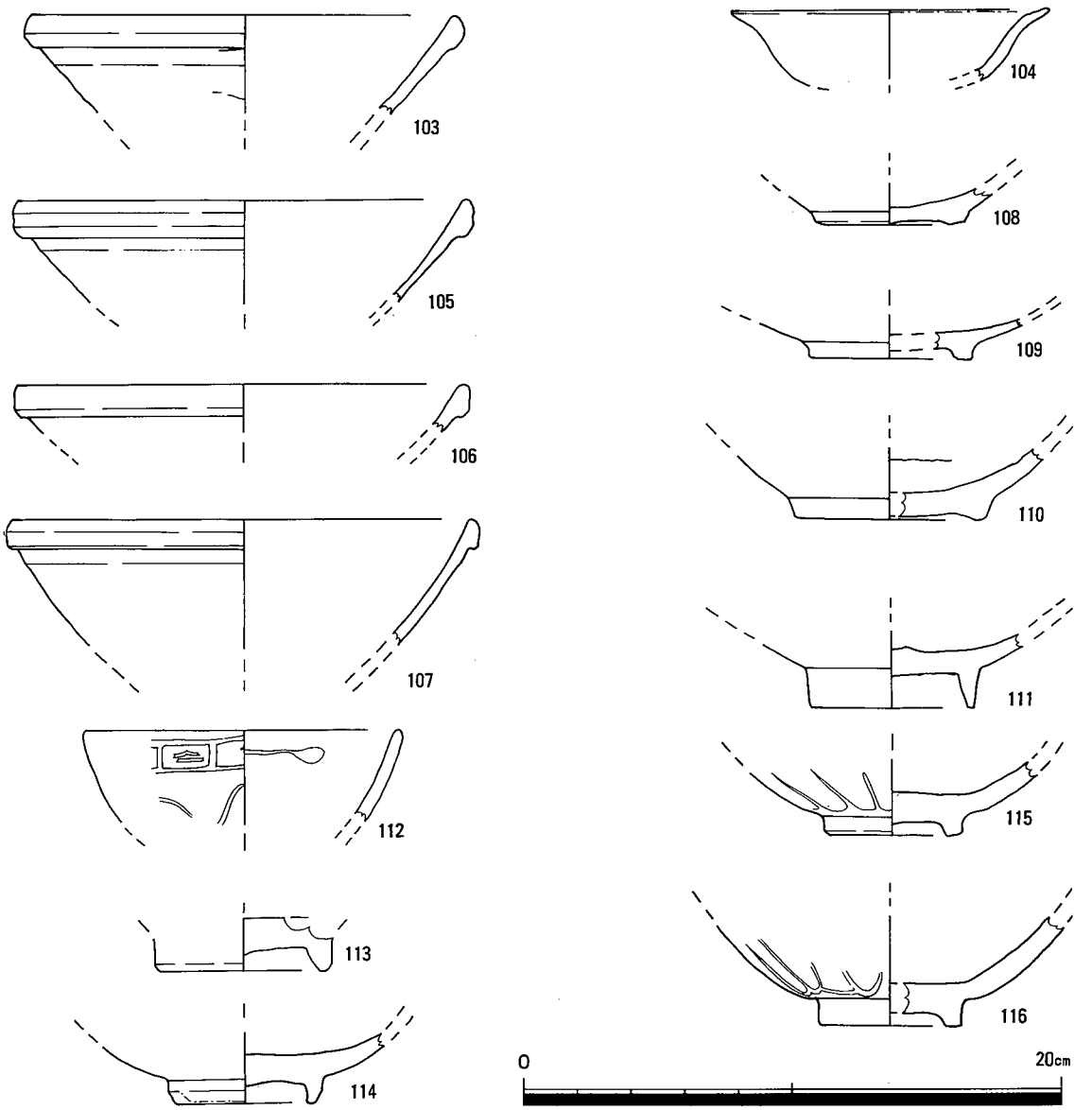


図19.　白磁・青磁

青花（図20、図版11）

117～123は景徳鎮の青花である。117は端反りの皿Ｂ類で、口径9.4cmを測る。15世紀末～16世紀前半のものである。118は碗Ｃ類の口縁で口径18.4cmを測る。119～123は碗高台部で、高台径５cm前後のものと、７～９cmのものとがある。

124～129は漳州窯系の青花である。124は端反りの皿Ｆ類で、口径17.4cmを測る。125は碁笥底の皿Ｃ類で、高台径５cmを測る。126は碗底部で、高台径4.2cmを測る。127～129は高台部片である。高台径は127が8.4cm、128•129は５cm前後に復元できる。高台には離れ砂が付着している。年代は117を除いて、全て16世紀末のものである。

瓦（図21）

130～133は軒瓦である。130～132は巴文の軒丸瓦である。130はＳＫ－120から廃棄された状態

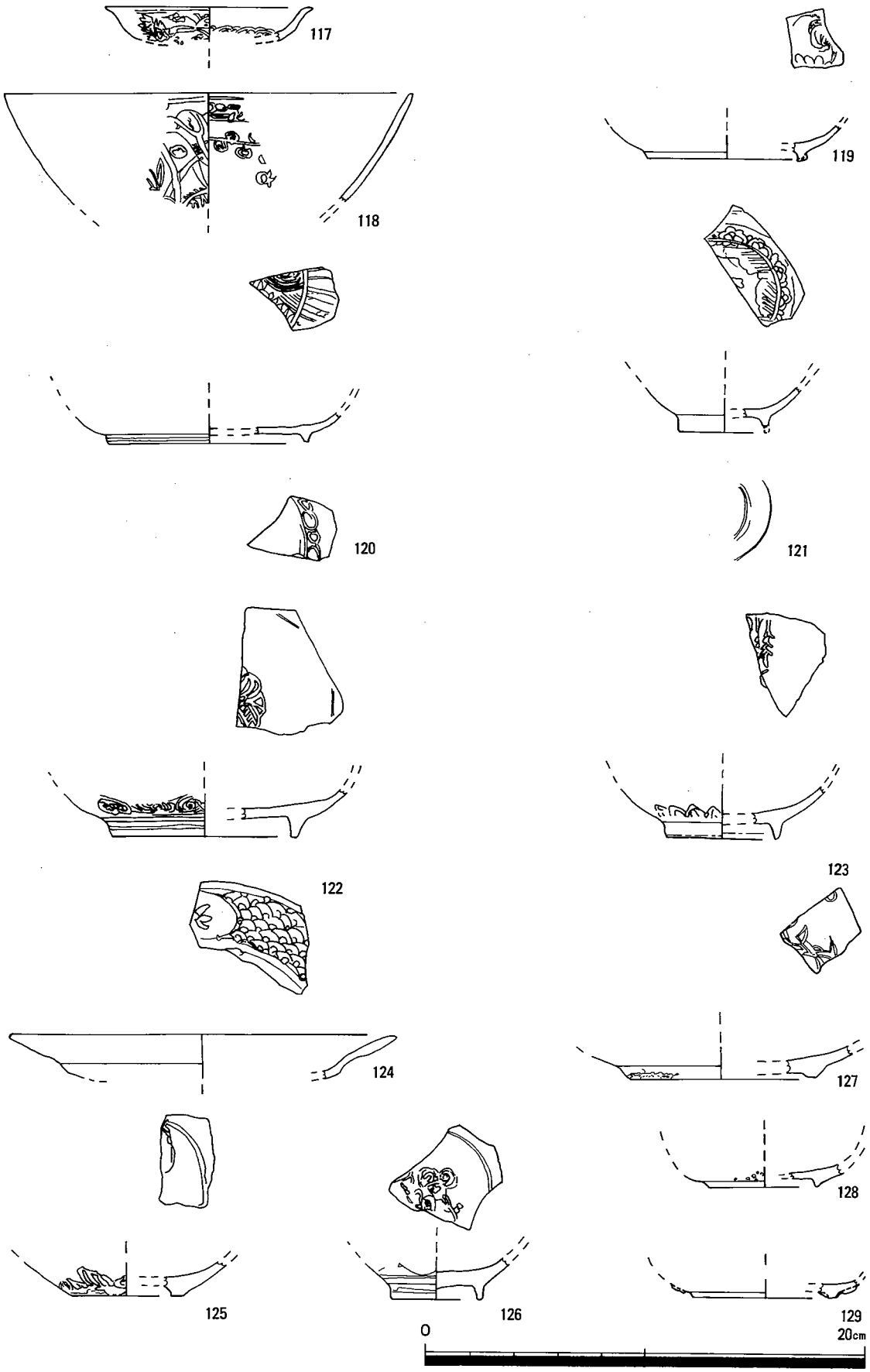


図20. 青花

で、一括して出土した瓦の一つで、半径は7㎝を測る。131・132 は破損によって、径は不明である。

133は唐草文軒平瓦である。

石器（図版12）

134は有舌尖頭器である。長さ9.2㎝、幅2.7㎝を測る。平行剥離に加え、刃先に細剥離を行なっている。王子遺跡に次いで、貝塚市内で2例目の出土である。

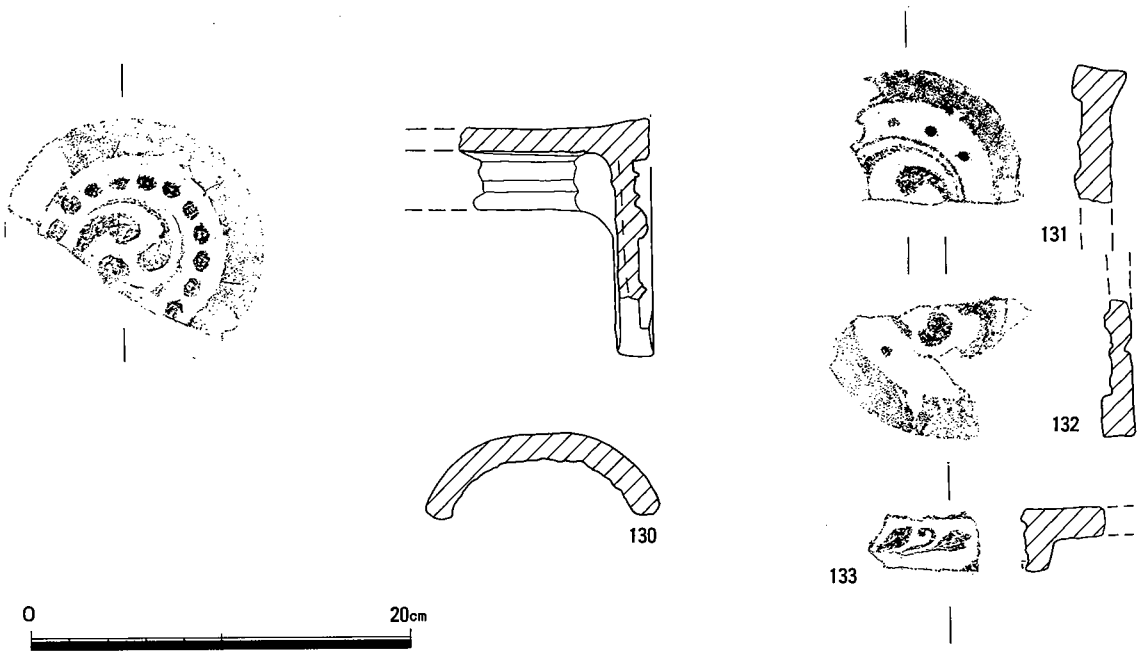


図21. 瓦

第４章　まとめ

今回の調査では、調査区全面で弥生時代から江戸時代までの各時期の遺構を検出することができ、調査地における各時代の遺構の変遷を押さえることができた。まず遺構については、近世の大規模な粘土採掘坑を検出したことと、弥生時代の井戸を検出したことが大きな成果といえるだろう。粘土採掘坑は、後述するが北側に存在する貝塚寺内町遺跡との関係を考える上で興味深い結果となった。また弥生時代の井戸については、今まで周辺の調査において弥生土器等の遺物は出土するものの、明確な遺構が見つかっておらず、今回加治・神前・畠中遺跡で初めて検出した弥生時代の生活の痕跡である。この事によって、弥生時代には調査区周辺に集落が広がっていたことが確認された。しかし井戸以外の住居跡等の遺構については、井戸の上部が古墳時代に入って調査区を南北に流れる自然流路で削られていること、江戸時代に入って粘土採掘が行なわれたこと等から削平されている可能性が高い。今後、調査によって同時期の遺構例が増加されるのを待ちたい。

自然流路ＳＤ－301については、深さが15～45㎝と浅く、遺物の出土量や時期幅等を考えても恒常的な流路ではなかったと思われる。調査区は近木川と津田川の中間に位置しているが、両川からも距離があり、氾濫原とするには無理がある。流路下面の地山は砂礫層を呈しており、埋没した河川の存在が想起される。

遺物については、中世を中心とした遺物が多数出土した中で、ＳＤ－301で出土した有舌尖頭器が特筆される。有舌尖頭器の出土は貝塚市域では王子遺跡に次いで２例目であるが、今回はほぼ完形で出土している。流路からの出土であるにも拘らず、摩滅も少なく良好な出土状態であることから、比較的近くから流れてきたものと思われ、近接地に縄文早期の遺跡が存在する可能性がある。市外周辺に目を向けると、大園遺跡、栄の池遺跡、三田遺跡等から有舌尖頭器が出土している。今回出土の有舌尖頭器は、大園遺跡、喜志西遺跡、高井田遺跡等の出土例と類似し、長さもあり、形も整っているタイプのものである。現在、有舌尖頭器は土器を伴う明確な遺構からの出土例が少なく、編年等は難しい状態にあるが、本調査地例を比較的古い段階に位置付けている編年もあり、周辺遺跡との関係も含め、今後の研究に大きな成果となり得るものと思われる。

また、粘土採掘坑からは多量の種類も豊富な陶磁器が出土している。特に青花が13点まとまって出土しているのが注目される。これらの内15世紀末～16世紀前半の１点を除いては16世紀末のものである。また、唐津の鉄絵皿の破片や「清水」や「森」等の銘の入った京焼系陶器が出土しているのも注目される。16世紀末は貝塚が信長によって寺内として取り立てられ、また紀州鷺ノ森から願泉寺に本願寺が移ってきた時期でもある。こうした時期の遺物が出土しているのは寺内町との関係を想起させ、興味深いものがある。

以上、今回の調査における遺構と遺物についての総括を述べたが、最後に調査区における歴史的な流れを述べて調査全体のまとめとしたい。

調査区での生活の痕跡が現れるのは弥生時代である。それ以前については、縄文早期に近接した地域に集落があったと思われるが、遺構としては弥生時代が初見である。その後古墳時代に入ると、南北に自然流路が流れはじめる。自然流路は浅く、急な流れを伴わずに自然にゆっくりと埋没していったと思われる。周辺には樹木も生えていたと思われ、多数の風倒木痕を検出している。自然流路埋没後、中世には周辺地域と同様に調査区も耕作地として開発されたものと考えられ、多数の鋤溝を検出した。やがて江戸時代には、調査区に堆積する良質の粘土を求め、大規模な粘土採掘が行なわれている。

このように調査区からは時代・種類共に多数の遺構を検出でき、大まかな歴史的流れを押さえ得ることができた。今回の調査結果は調査区周辺のみならず、他の遺跡や他の地域との関わりを考えさせるものが多く、その点が今後の課題となるだろう。

粘土採掘坑について

今回の調査では、広い範囲で粘土採掘坑を検出し、大きな成果を得た。そこで、今回検出した粘土採掘坑についてもう少し詳しい考察を加えていきたい。粘土採掘坑は山状に地山が残る形状から幅２～３ｍの長方形を一単位としている事は既に述べた。これらの単位をまとめると最大約20×30ｍの大きな単位となる。おそらく採掘は一回に必要に応じた一定量の粘土を採取し、それを繰り返し行なったためにこのような形状となったものと思われ、大きな単位が粘土採掘の一回の量であると思われる。今回検出した粘土採掘坑の類例を見ていくと、貝塚市内においては1996年度に発掘調査を行なった東遺跡の例がある。東遺跡では、約２～３×６～７ｍ、最大５×９ｍの長方形を一単位としており、深さも１ｍ近くに及ぶものがあり、今回検出した粘土採掘坑の状況と非常に類似している。もう少し範囲を広げて類例を見ていくと、堺市教育委員会が行なった北花田遺跡、南安井町遺跡、堺環濠都市遺跡―少林寺町東４丁ＳＫＴ391地点の発掘調査で検出された粘土採掘坑がある。いずれも平面形は長方形に近く、深さも約50㎝前後、深いものでは約１ｍ前後に及ぶ例がある等今回検出した粘土採掘坑の例と類似している。また出土遺物から得られたこれら粘土採掘坑の年代が18～19世紀代である点も同様である。これらの遺跡に共通する点はいずれも中世～近世にかけての都市遺跡の周辺に存在するという事である。今回調査を行なった加治・神前・畠中遺跡と東遺跡の周辺には、約１㎞の範囲内に貝塚寺内町遺跡が存在する。同じく堺市には堺環濠都市遺跡が周辺に存在しており、これら都市遺跡と粘土採掘坑は関連していると思われる。文献においても、17～18世紀には寺社が復興し、商業も発展していく段階にあり、貝塚においても天正15年頃から新町が建設されていくようになる。また、地山粘土のみではなく、調査地に存在していた中世の耕作土を混ぜ合わせて採取している点等、おそらく建築用粘土を採取したものと考えられ、寺内町建設に大きく関わっているものと思われる。

また、今回検出した粘土採掘坑は平面方形の大型で、深さの深い土坑が集中するタイプであったが、その他に不整形の土坑が固まっているタイプ（Ａ）、深さが浅い土坑で、面積が大きく広がるタイプ（Ｂ）、幅50㎝程度の素掘り溝状を呈するタイプ（Ｃ）等、粘土採掘坑にはいくつか

のタイプが存在する。Aタイプには大和郡山市が調査を行なった平城京右京8条3坊3坪の発掘調査に類例が求められる。径1～1.5m、深さ1m前後の不整形の土坑が一定の範囲に集中して検出されており、調査者によって中世の土器生産に関する粘土採掘坑と報告されている。Bタイプには本市が1992年に調査した津田遺跡の粘土採掘坑が類例である。津田遺跡では深さ10～20cm、深い部分では30cm程の浅い土坑が10m以上に広がっていることが確認された。他に富山県の下老子笹川遺跡でも類例が認められる。Cタイプは奈良県斑鳩町の目安遺跡の他、いくつか大阪府近隣においても検出されている。これらのタイプが年代的な差であるのか、それとも用途における違いであるのかは粘土採掘坑報告例も乏しい現在、判断することは難しい。おそらく両方の可能性を考えていく必要があるだろう。今後類例が増加するのを待って詳細な考察を加えていきたい。

堺市教育委員会　堺市文化財調査概要報告第50冊　南安井町遺跡発掘調査概要報告
—市立病院建設に伴う調査—　1995. 3

〃　〃　第43冊　北花田遺跡発掘調査概要報告
—KKD－1地点：堺市北花田町—　1994. 3

〃　〃　第45冊　堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告
—少林寺町東4丁(少林寺小学校) SKT391 地点—　1994. 3

大和郡山市教育委員会　大和郡山市文化財調査概要28　平城京右京8条3坊3坪発掘調査概報　1993. 3

貝塚市教育委員会　貝塚市埋蔵文化財調査報告第34集　津田遺跡発掘調査概要　1994.12.28

㈶富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　埋蔵文化財調査概要－平成7年度－　1996

奈良県立橿原考古学研究所　奈良県遺跡調査概報1981年度　斑鳩町目安遺跡発掘調査概報　1983. 3. 31

付　論

貝塚市内発見の近世粘土採掘土坑

前　川　浩　一

1．はじめに

近年増加した発掘調査は様々な新事実を提供する。特に、従前では調査対象ではなかった近世遺跡についても、近年、計画的に発掘調査が実施されるようになり、大きな成果が得られている。貝塚市内においても、市名の元となっている「貝塚町」の前身である貝塚寺内町遺跡について、限られた中でのものであるが、徐々に発掘調査が実施できるようになり、断片的ではあるが様々な成果が得られている。

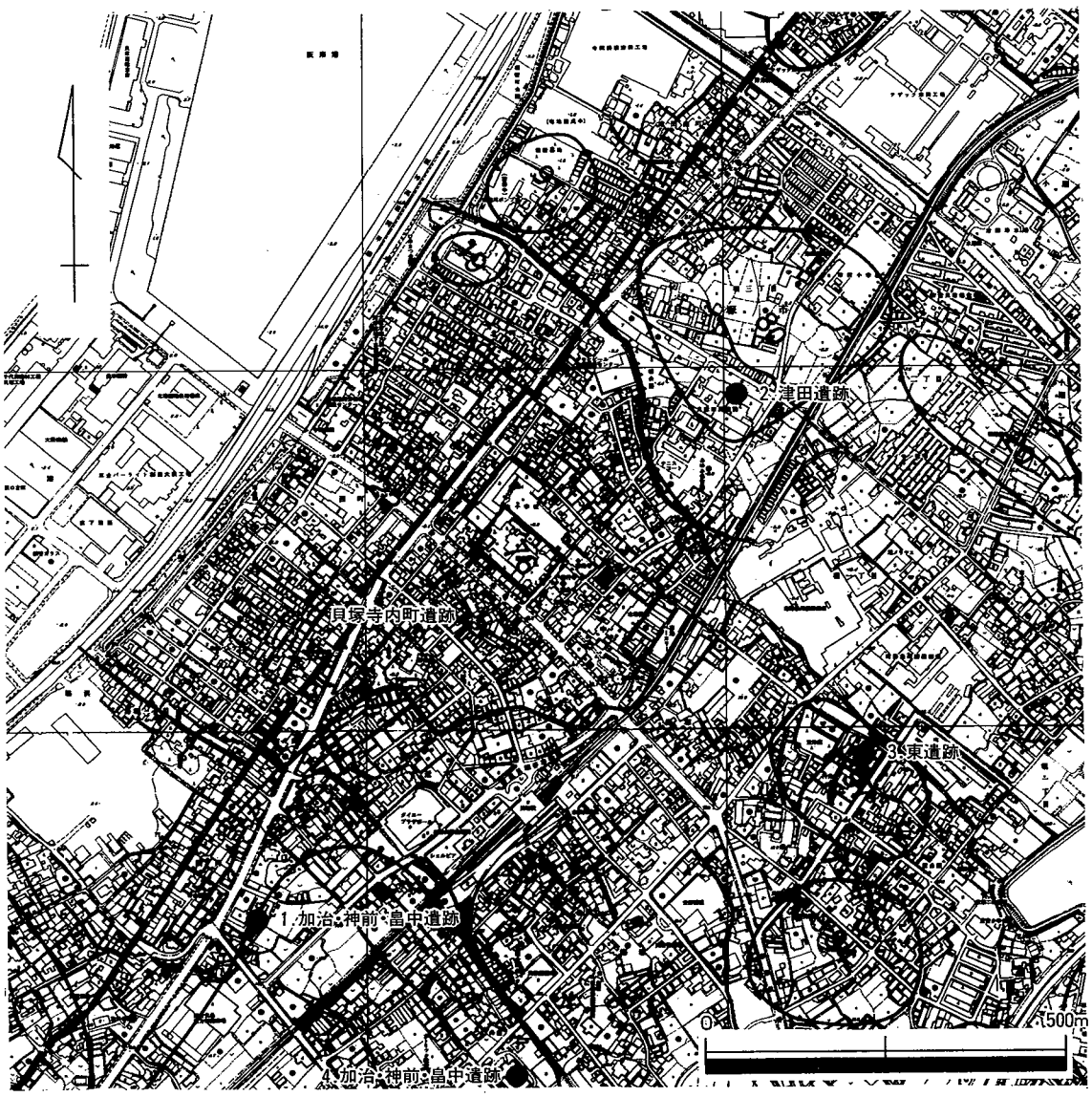


図22.　粘土採掘土坑検出地点

そのような状況と関わって、貝塚寺内町遺跡を取り囲むように位置する周辺遺跡の近年の発掘調査において、近世の粘土採掘土坑を多数確認している。概要報告段階では、位置関係から寺内町との関わりを推定していたが、それぞれの調査例単独では、採掘された粘土の用途や寺内町との関わりについて検証することは困難であった。

そこで、小稿では貝塚寺内町遺跡周辺遺跡にて確認した近世粘土採掘土坑について総合して検討し、採掘粘土の用途等について考えてみたい。[1)]

2．粘土採掘土坑の検出例（図22）

1）加治・神前・畠中遺跡[2)]（図23）

平成2年に実施した発掘調査において採掘土坑を検出している。調査地点は本遺跡の北部に位置し、寺内町の南端から約200mを測る地点である。調査では中世の遺物包含層はほとんど検出できず、遺構の深さも浅いため、近世段階で平面的な削平を受けたと推定できる。したがって、遺構の状況は良好では無く、出土遺物も少ない。

確実な粘土採掘土坑と判断できるものは、ＳＤ－５、ＳＸ－９、12、14、16、19の６ヶ所である。規模は1.5×６ｍの溝状のものと、５×６～15ｍを測る円形に近い不整形のものとがある。採掘土坑は地山である黄色粘土が厚く堆積する場所に存在し、埋土は淡灰色土であり、深さ約20cmを測る。出土遺物は少量であるが陶磁器等が出土している。遺構の残存状況が不良であるのでこれ以上の詳細は不明だが、18世紀以降に掘削されたものである。

黄色粘土の堆積が厚い部分に存在することから、この粘土を狙った採掘土坑であることは明らかであり、埋土は周辺の耕作土を埋め戻したものと考えられる。また、採掘の規模は小さく個人的なものである可能性が高い。

2）津田遺跡[3)]（図24）

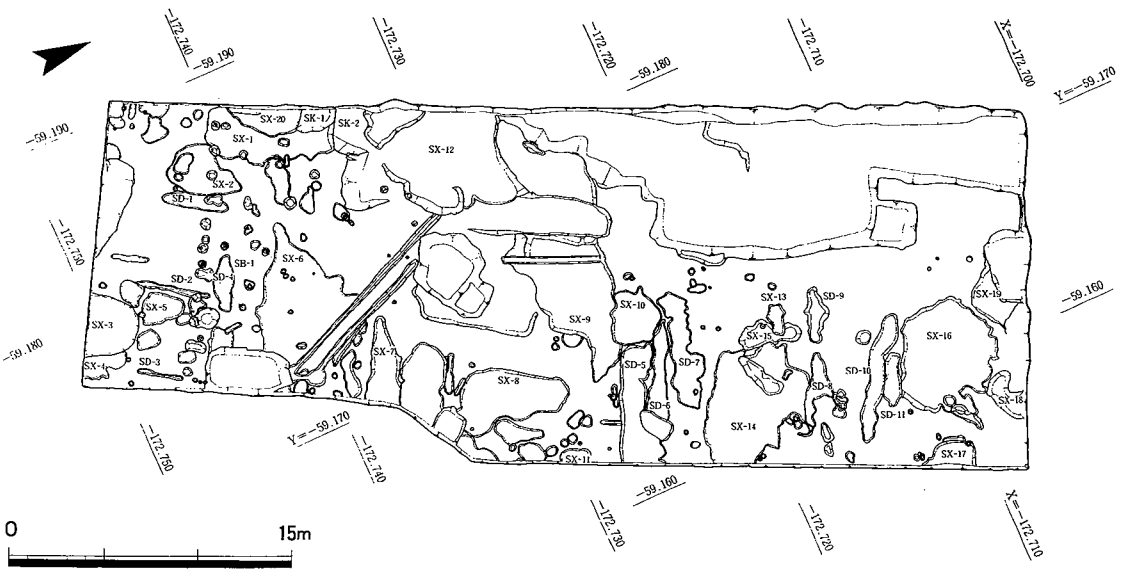


図23.　加治・神前・畠中遺跡

平成５年に実施した発掘調査において採掘土坑を検出した。調査地点は本遺跡の南西部に位置し、寺内町の北東端から約150ｍを測る地点である。発掘調査は開発計画との関係で２ヶ所の調査区を設定した。

採掘土坑は調査区のほぼ全面にて検出しており、第１区ではＳＫ－４、５、６、第２区ではＳＫ－２、３、12の6ヶ所である。第１区のものは溝状を呈し、幅６～12ｍ、深さ0.1～0.3を測る。埋土はいずれも暗オリーブ灰色砂質土を主体にし紫灰色砂質土、黄灰色粘土のブロックを含む。第２区のものは1.5～4.1×2.1～5.9ｍを測り、円形に近い不整形である。深さは0.4～1.8ｍを測り、埋土は黄灰白色粘土、暗紫灰色粘土、黒褐色粘土の混合したものである。遺物は第１区では青花、陶磁器等が出土しているが、第２区では出土していない。

調査区のほぼ全面にてこれらを検出し、さらに調査区外に広がると推定できるため、非常に大規模な作業であることが理解できる。埋土については、周辺に存在する粘土等だけではなく、様々な土にて埋め戻しを行なっていることから、他地点からの搬入が考えられる。

３）東遺跡[4)]（図25）

平成６年に実施した発掘調査にて採掘土坑を検出した。調査地は本遺跡の北部に位置し、寺内町東端から約300ｍを測る地点である。開発計画にもとづいて、調査区は３ヶ所設定した。採掘

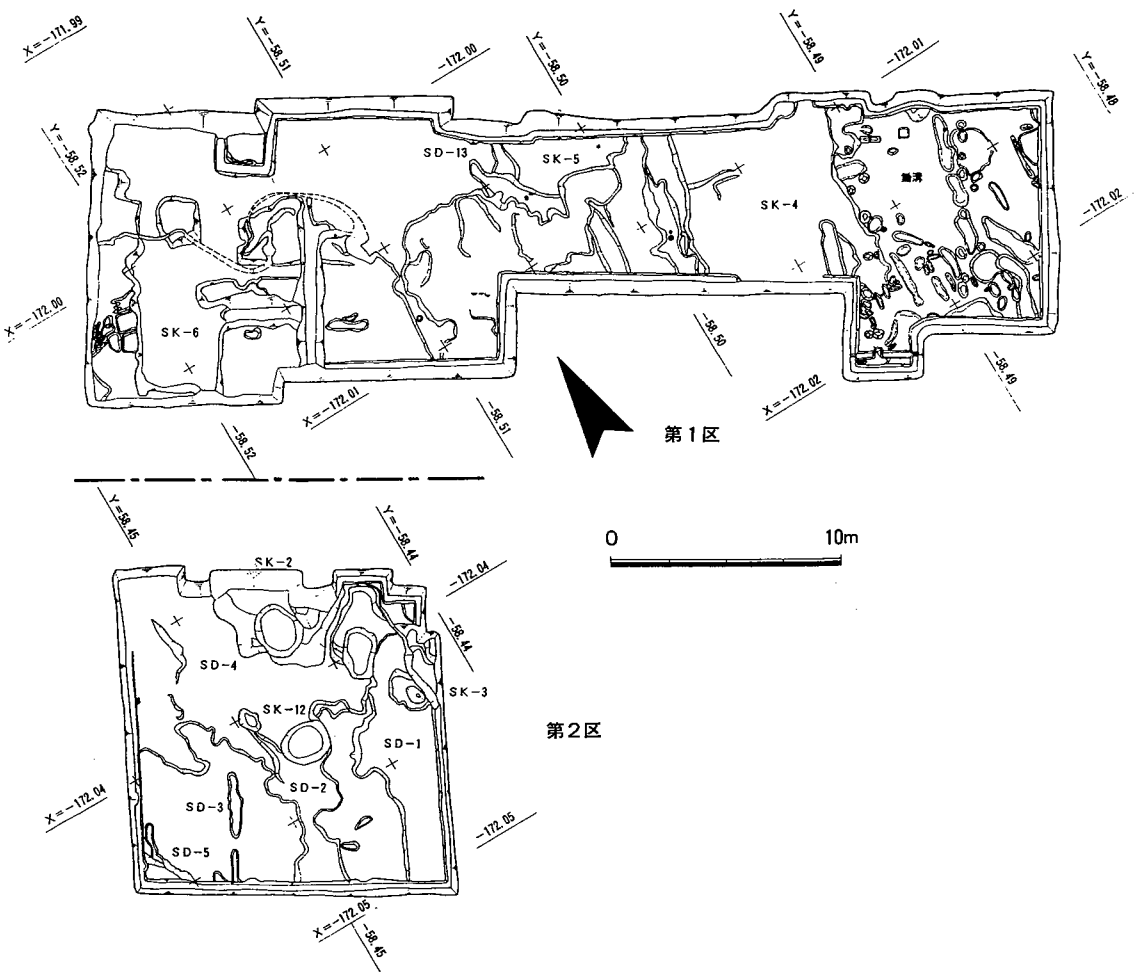


図24.　津田遺跡

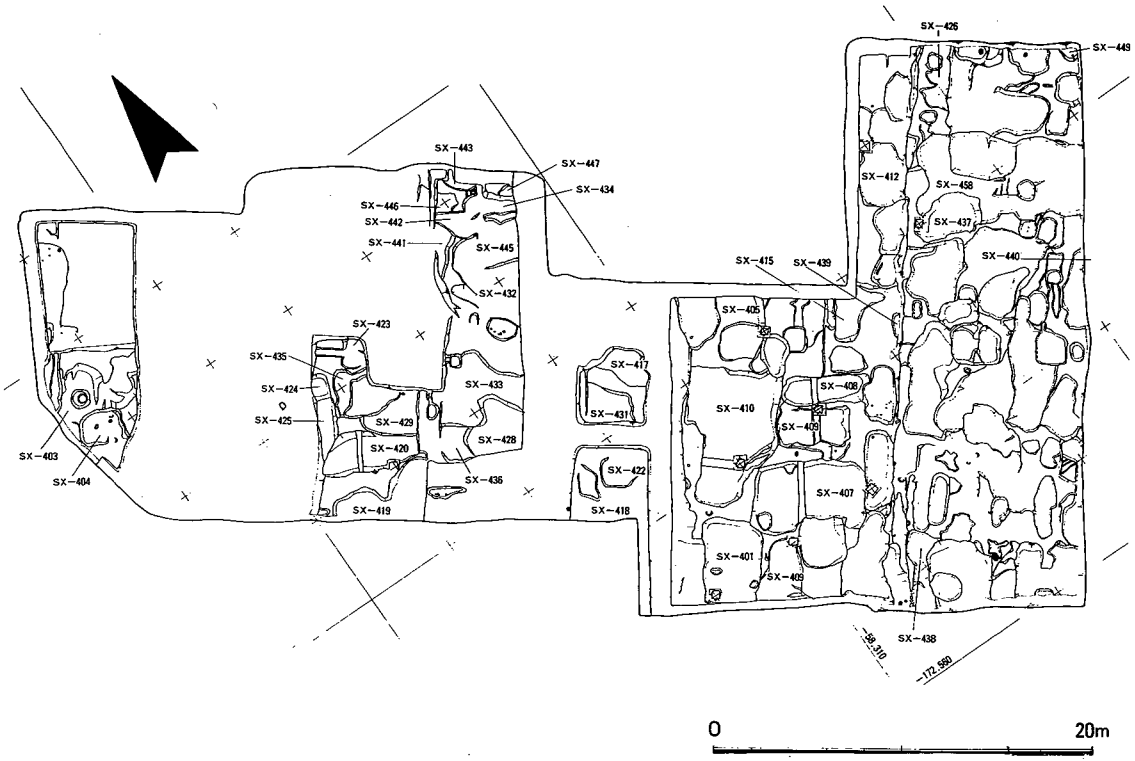


図25.　東遺跡

土坑は第３区にて多数検出した。

第３区は、既存建物の建設時に大幅な削平を受けているものの、それ以外では調査区のほぼ全域にて採掘土坑を検出した。地山は灰白色粘土であり、この粘土が存在しない第１、２区では採掘土坑は無く、明らかにこの粘土採取が目的と見られる。規模は1.5～５×４～７ｍを測り、長方形、方形、円形に近い方形等がある。埋土の違いから２回に分けて掘削を行っており、調査区東端部分のものが淡黄灰色土であり、その他が灰色砂質土にオリーブ灰色土、灰白色粘土のブロックが混じるものである。深さは前者が約１ｍ、後者が30～40㎝を測る。遺物は遺構の上層近くに集中して出土しており、近世後半の陶磁器等が出土している。特に瓦が多量に出土している。

埋土の状況から数ｍ四方を掘削の一単位とし、それを繰り返し一帯に採掘を広げている。さらに、その方法にて調査区内では２回の採掘を行っていることが読み取れる。埋め戻しについては、採り漏らしの粘土や耕作土（灰色砂質土）を主体として埋めているが、それ以外の土も存在しており、他地点からの搬入が考えられる。

４）加治・神前・畠中遺跡

今回報告した平成７年の調査にて採掘土坑を検出した。調査地は本遺跡の北端部にあたり、寺内町南端から約500ｍを測る地点である。

発掘調査では、調査区の西部分のほぼ全面において採掘土坑を検出している。位置的には地山である黄色粘土が堆積している部分に存在しており、明らかに粘土採取を目的としていることが理解できる。規模は３×10ｍを測る長方形を採掘単位とし、それを３、４回繰り返し、10×13ｍの大単位となるもの、2.5×10ｍを測る長方形を採掘単位として、同じく３、４回繰り返し、12

×12の大単位となるもの、5×5mを測る不整形を単位とするものがある。深さは約0.5m～1mを測り、埋土は黒褐色土、暗褐色土、黄灰色土、褐灰色土、黄色粘土ブロック、砂礫等さまざまであり、採掘時に出た黄色粘土や調査地に存在した遺物包含層などと共に、他所から搬入した土が多く埋土となっている。遺物は、多数の陶磁器、瓦片、焼土、火を受けた瓦片等が出土し、調査地の遺物包含層に含まれたと推定できる瓦器、土師器、須恵器等も出土している。特に今回青花が11点出土し、市内における最多出土例となった。また、大単位同志の間で、幅約50cm程度で帯状に粘土採掘が及んでいない部分が存在し、採掘時に上面の畦を破壊せずに、農地区画の中だけを採掘していることが読み取れる。

今回の採掘土坑は、検出したものだけでも約2,500㎡に及んでおり、一度に採掘したならば非常に大がかりなものである。

3．採掘粘土の用途

すべての調査区は、土層断面観察から、粘土採掘時は農地であったことが判明している。

まず、埋土の状況からすると、1）加治・神前・畠中遺跡例以外は調査地に存在した耕作土、掘り漏らした地山ブロックを埋め戻しに使用しているものの、明らかに他地点からの搬入と見られる土が含まれており、単純に粘土採取後、周辺に存在した土によって埋め戻したとはできない。3例とも調査区外に広がるほどの大幅な採掘であり、周辺の土によって埋め戻しを行なった場合、大幅に周辺の土を削り使用することとなる。したがって、採掘地周辺の地形を大きく変化させることなり、採掘地を旧地形を変えずに農地に復旧することは不可能である。また、埋土内に陶磁器、瓦が多数含まれており、農地にこれら陶磁器等が多数散布していたとは考えられない。

それではこれらの土や陶磁器等が埋土に含まれている理由はなにか。市内各地での発掘調査実施中に地域住民から聞いた話では、農家にて住居を改築する場合、壁土等の建築用材として農地の床土以下を掘削し、その後に既存の住宅の解体残土や瓦をそこに捨てるということであった。この一連の作業が地域的に広く分布しているのかは、聞取り調査を実施していないため不明であるが、時代的には昭和中頃まではされていたようである。[5)]

この現代例と3ヶ所の採掘土坑の状況を比較した場合容易に理解できる。採掘地周辺に存在しない土が含まれることは、建物解体時の残土であり、農地に大量には存在しないはずの瓦、陶磁器が多量に含まれることは建物解体時の瓦、廃棄された陶磁器、造成作業の削平した遺物とできるのである。したがって、粘土採掘の目的は建築用材であることが断定できる。

4．採掘粘土の使用場所

それでは、採掘された粘土の使用場所はどこか。ここで注目したい出土遺物に青花がある。2）津田遺跡、4）加治・神前・畠中遺跡において、前者では1点、後者では11点の青花が出土している。

市内における発掘調査では、青花の出土は一般的では無く、非常に限られる。寺院跡や農地か

ら出土するものの、1調査にて小破片が1点程度出土する例が数例という状況にある。[6] その中にあって、貝塚寺内町遺跡の発掘調査においては、青花自体の年代に合致した遺構等からの出土では無いものの、近年の発掘調査において江戸時代に形成された遺物包含層等から複数出土する例を確認しており、今回の加治・神前・畠中遺跡を除いて、貝塚寺内町遺跡が市内の集落遺跡に直接関係する青花出土の最多遺跡である。[7]

また、貝塚寺内は、「寺内」としての取立、信長、秀吉からの「寺内」としての扱いについては問題を持つものの、天正11年（1583）から同13年（1585）にかけて、本願寺御堂が置かれ、浄土真宗の中心地であった。更に、江戸時代を通じて幕府より「寺内」として安堵され、願泉寺を中心とした一大都市であった。町内には、商家、手工業職人が多数存在し、周辺地域における商業、手工業の中心地の一つであった。このように集落の歴史、性格からみて、青花の示す同時代に直接入手したこと、後に購入、伝世・廃棄されたこと等、これら輸入磁器を取り扱っていたことは容易に理解できる。[8]

間接的な事実からの推定ではあるが、現在の貝塚市域周辺を見た場合、貝塚寺内以外に青花と結びつく集落等は見い出せず、各発掘調査にて出土した青花の出自は貝塚寺内であることはほぼ確実と考えられる。貝塚寺内町内での建物等建設のために粘土が採掘され、解体残土等が採土地に運ばれたと見られる。

採掘後の運搬の距離を見ると、各発掘調査地点は貝塚寺内町遺跡から200～500ｍの地点に位置する。皆負子、天秤棒、もっこ等にて運搬する[9]作業効率を考えると非常に好条件の地点に立地している。[10] したがって、貝塚寺内町遺跡を囲んで周辺に存在する粘土採掘土坑は、すべて寺内町のためのものであることが考えられる。

また、貝塚寺内町遺跡内の段丘上に位置する地点における発掘調査では、ほとんど造成のための盛土を行わず、切土整地が主体となっていることが明らかになっている。[11] 切土した残土は町内にて処分することは不可能であり、寺内外に廃棄場所を求める必要性が存在したことが理解でき、この事からも先の推定が裏打ちできる。[12]

5．おわりに

五十川伸矢の研究によると、[13] 近世段階では、土を扱う専業集団が生まれていたこと、商品として土が売買されたことが想定されている。先に見たとおり、4）加治・神前・畠中遺跡の検出例は、2,500㎡にも及ぶ採掘土坑群を確認し、採掘された粘土量は膨大である。作業量からすれば採掘集団を考えなければ到底理解できるものではない。

今回の考古学成果にもとづく検討では、売買関係、採掘集団、具体的な採掘行為等について考えることはできないが、今で言う「リサイクル」が発達した江戸時代社会においても、これら解体残土等については「リサイクル」できなかったことを具体的に明らかにし、また、それらの処分方法の一つを明らかにできたことは大きな成果と考える。[14]

注

1）　粘土採掘土坑からの出土遺物は、幕末までのものであるが、埋土には様々な遺物が混在し、出土遺物の下限時期が必ずしも遺構の時期とするのは問題があるため（例、近世中頃までの遺物しか出土しないが、実際は幕末の遺構である。等)、今回は「近世」として大きくとらえる。

2）貝塚市教育委員会『加治神前畠中遺跡発掘調査概要』貝塚市埋蔵文化財調査報告第20集 1991

概要報告では埋土の記載が抜けているので、ここに改めて報告する。

3）貝塚市教育委員会『津田遺跡発掘調査概要』貝塚市埋蔵文化財調査報告第34集　1994

概要報告にて肥前系染付と報告しているもの（図10－1）は、青花であることをここで訂正する。

4）貝塚市教育委員会『東遺跡発掘調査概要Ⅰ』貝塚市埋蔵文化財調査報告第37集　1996

概要報告では、第3区第2面における遺構記述が不足しており、調査区北西の段差部分を境として、東側段上部分の埋土が淡黄灰色土、西側段下部分が灰色砂質土ベースとはっきりと分かれる。また、記載のあるもの以外の図面上にある遺構はすべて粘土採掘土坑であることをここに付記する。

さらに、第3区の面として報告しているものは、実際には、同一面上で切り合い関係をグループに分け、新しいものから順に面としているものであり、遺物包含層が間に存在するものではない。

なお、これ以外にも概要報告書については不充分な記述が多いため、引用される場合はご一報いただきたい。

5）貝塚市沢地区にて、採掘後に瓦をその穴に捨てるという話を聞いた。

6）貝塚市教育委員会『加治・神前・畠中遺跡発掘調査概要―保健合同庁舎建設に伴う発掘調査―』貝塚市埋蔵文化財調査報告第36集　1996

7）貝塚市教育委員会「Ⅰ　貝塚寺内町遺跡の調査」『貝塚市遺跡群発掘調査概要18』貝塚市埋蔵文化財調査報告第38集　1996

8）貝塚市役所『貝塚市史　第3巻　資料』　1958

47P、58P　「貝塚御座所日記」

71P　「（包紙）権現様御黒印之写」慶長15年（1610）願泉寺文書

130P　「了観師記万記録」延享3年（1746）願泉寺文書

9）ＮＨＫデータ情報部編『ヴィジュアル百科　江戸事情　第2巻　産業編』雄山閣出版　1992

162Pの「土木人夫」土の運搬の様子

10）　陸上での運搬手段として、大坂ではベカ車があるが、町奉行所はきびしく台数制限等を実施しており、あまり一般的ではなかったようである。したがって、人力による運搬が主と想定した。

板倉聖宣『日本史再発見　理系の視点から』朝日選書477　朝日新聞社　1993

11) 貝塚市教育委員会「Ⅱ　貝塚寺内町遺跡の調査」『貝塚市遺跡群発掘調査概要18』貝塚市埋蔵文化財調査報告第38集　1996

12)　塵芥については、浜に捨てよとの命令が出ているため、解体残土等についても、同様の扱いがあった可能性はあるが、量的にみて浜に無差別に廃棄したとは考え難い。

政令

寛政十二庚申四月十五日

一、御境内之塵芥捨所之義ニ付、左之通書付

塵芥之義、向寄之川筋畠等へ持出捨候様子ニ相見へ、有間敷次第ニ候、

以来浜へ持出捨可レ申候、若心得違川筋畠へ持出候ハ、急度御沙汰可レ有レ

之事

申四月

右年寄当番へ御渡、尚御家来一統へも仰聞候

貝塚市役所『貝塚市史　第3巻　資料』　1958　168P

13) 五十川伸矢「第6章　土採りの歴史的変遷」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ—京都大学病院構内遺跡の調査—』京都大学埋蔵文化財研究センター　1991

14)　江戸では、下肥、灰等の廃棄物のリサイクルが行われており、火事跡等に発生する瓦、壁土等は道路の補修に利用されたり、へっつい作りに塗りこめられたりし、それでも処分できないものは埋立地に運ばれたとのことである。

しかし、貝塚寺内の中ではリサイクルの様子は明確ではなく、周辺には江戸の様な埋立地は存在していないようであり、必然的に寺内町周辺にて処分する必要が出てくる。

石川英輔『大江戸えねるぎー事情』講談社　1990

石川英輔『大江戸リサイクル事情』講談社　1994

渡辺善次郎「江戸時代になぜゴミ問題がなかったのか？」『江戸の真実』別冊宝島126号　ＪＩＣＣ出版局　1991

報告書抄録

ふりがな	かじ　こうざき　はたけなかいせきはっくつちょうさがいよう
書名	加治・神前・畠中遺跡発掘調査概要
副書名	
巻次	
シリーズ名	貝塚市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第　42　集
編著者名	前川　浩一、上野　裕子
編集機関	貝塚市教育委員会
所在地	〒597 大阪府貝塚市畠中1丁目17番1号　TEL 0724(23)2151
発行年月日	西暦　1997年　3月　31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
かじ　こうざき 加治・神前 はたけなかいせき ・畠中遺跡	おおさかふ 大阪府 かいづかし 貝塚市 かしん 加神	27208	23	34度 26分	135度 21分	19950403 19951117	5,250	共同住宅 建設

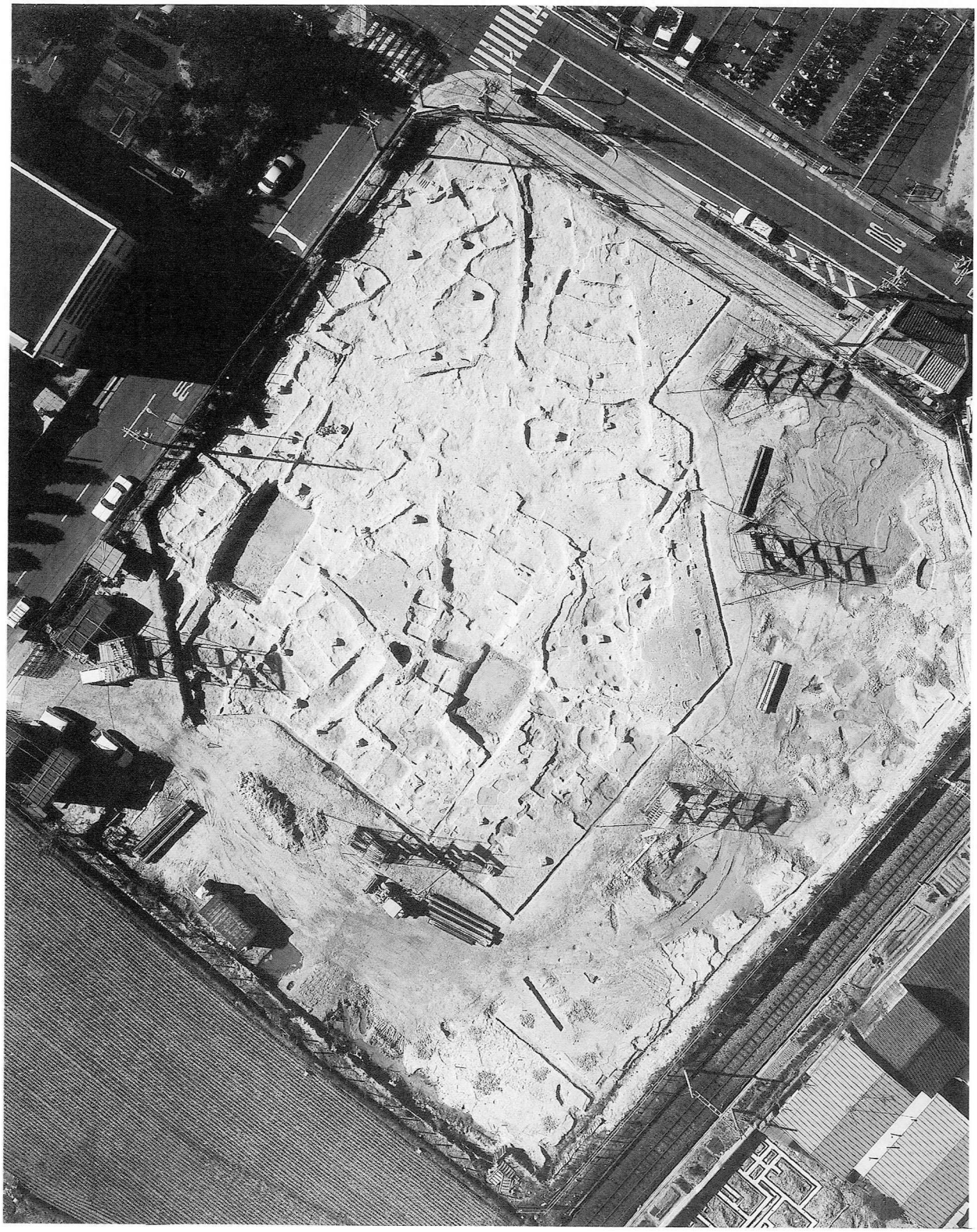
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
かじ　こうざき 加治・神前 はたけなかいせき ・畠中遺跡	集落跡	弥生時代 中世 近世	河川、溝、井戸 粘土採掘坑	弥生土器 瓦器 土師器 須恵器 陶磁器 石器	

図　　版

図版1　検出遺構

第1区全景

図版2　検出遺構



第2区全景

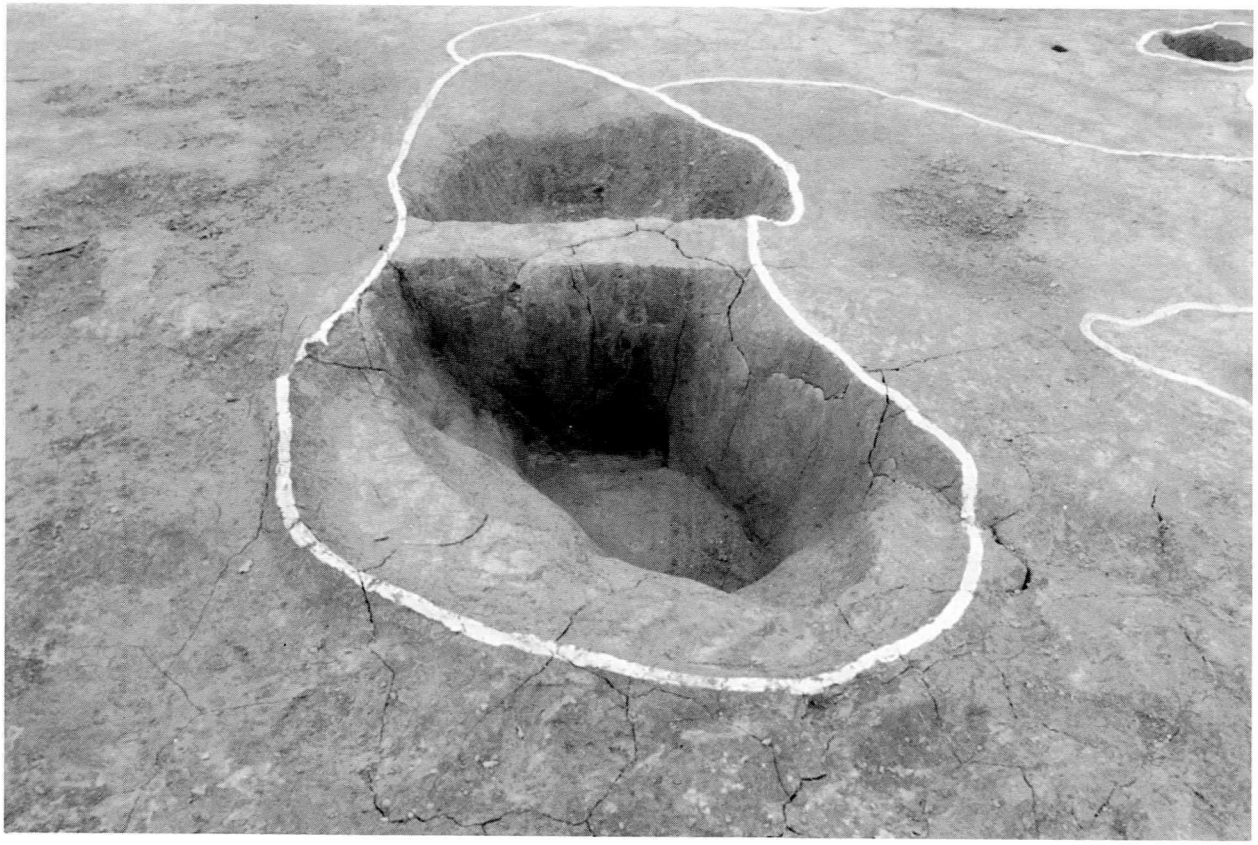
図版3　検出遺構　第1区

1.第1区　SD-301　　南東より

2.同　上　　南西より

図版４　検出遺構　第１区

１.第１区　土坑群　　西より



２.第１区　SK-301　　北東より

図版5　検出遺構　第1区

1.第1区　SD-302　　東より

2.第1区　SE-301　　南西より

図版6　検出遺構　第1区・第2区

1.第2区　SK-124　　南西より

2.第1区　第3層下面鋤溝群　　南西より

図版7　検出遺構　第2区

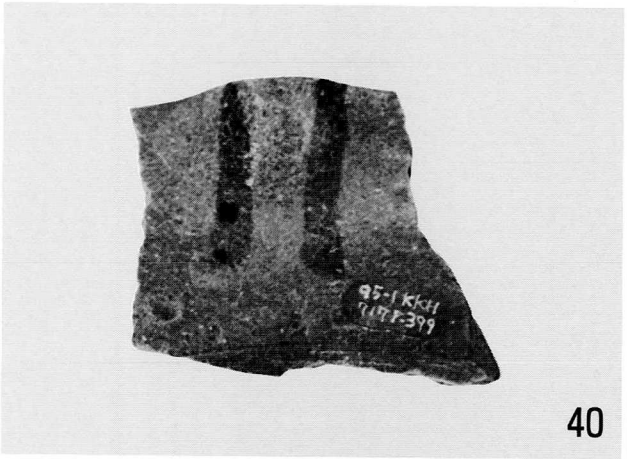
1.第2区　SK-109　　北東より

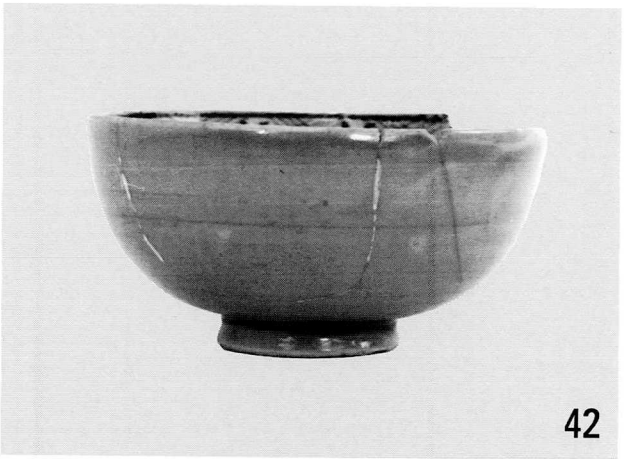
2.第2区　SK-104、SK-105　　北より

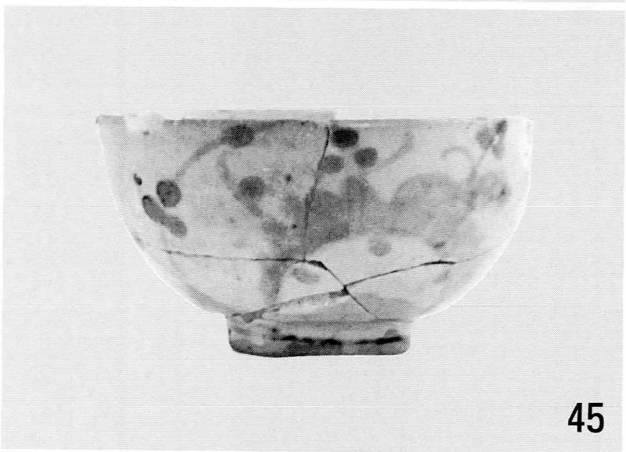
図版８　検出遺構　第２区

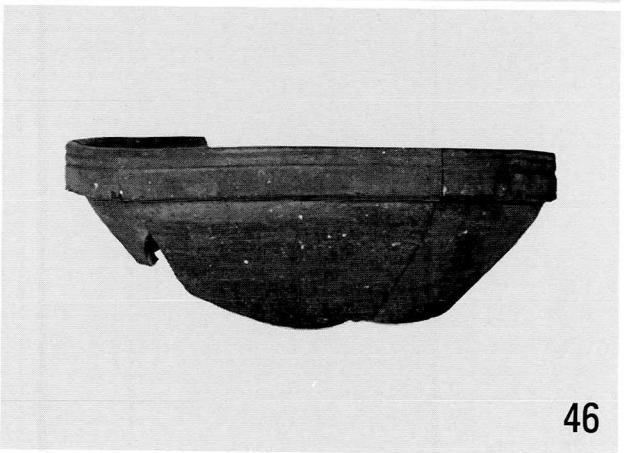
１.第２区　SK-120　　北より

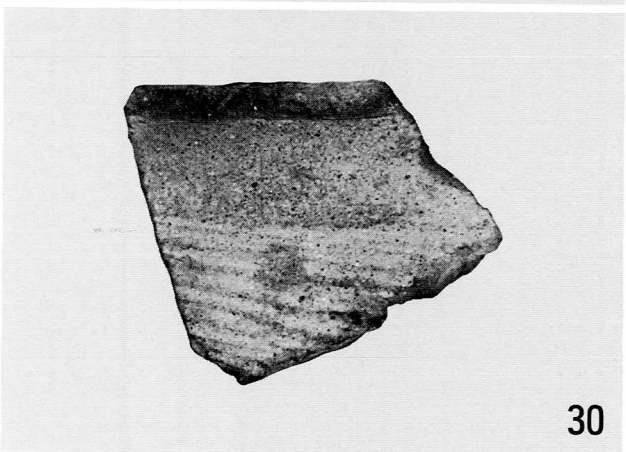
２.第２区　SK-120瓦出土状況　　南東より

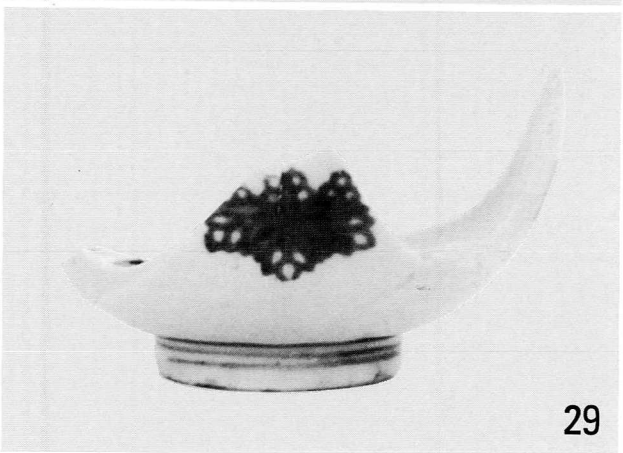


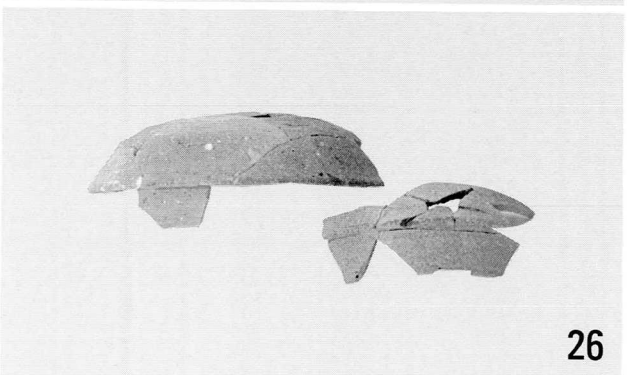


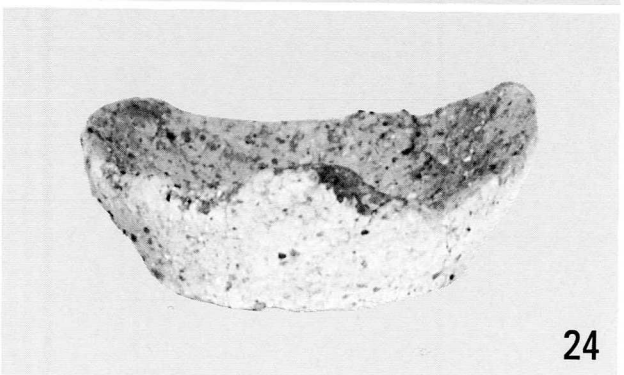




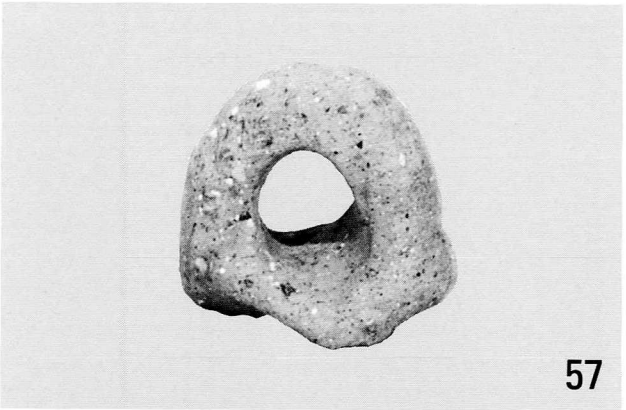


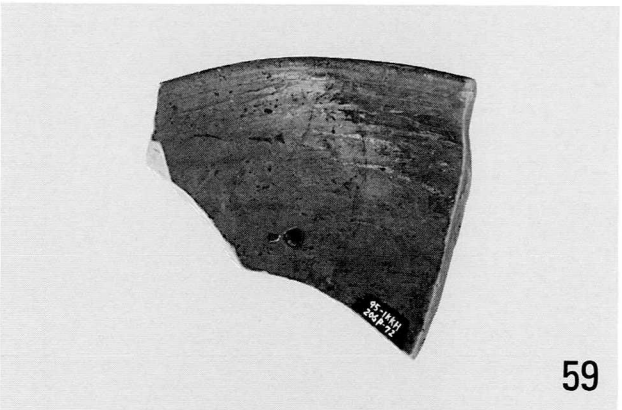


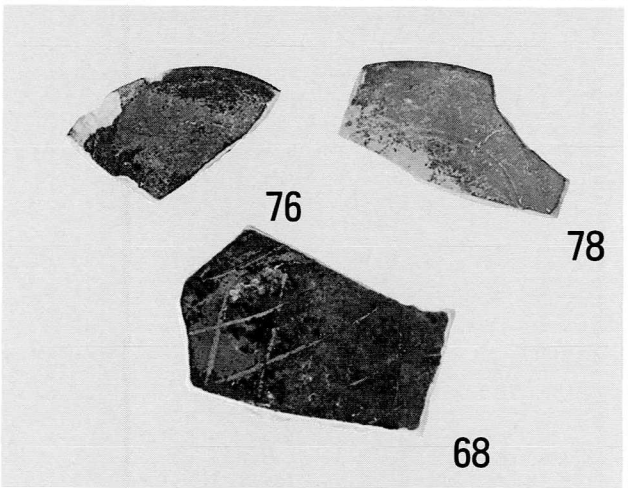


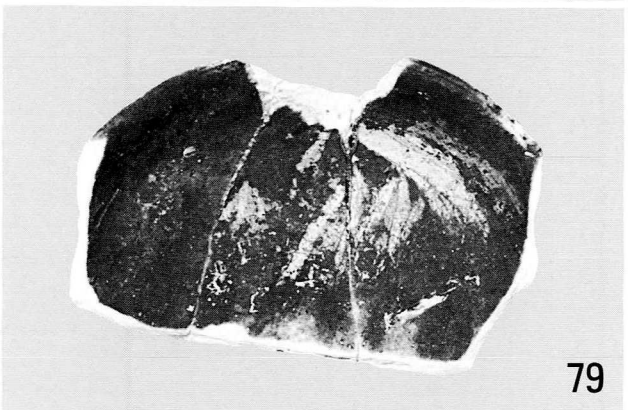


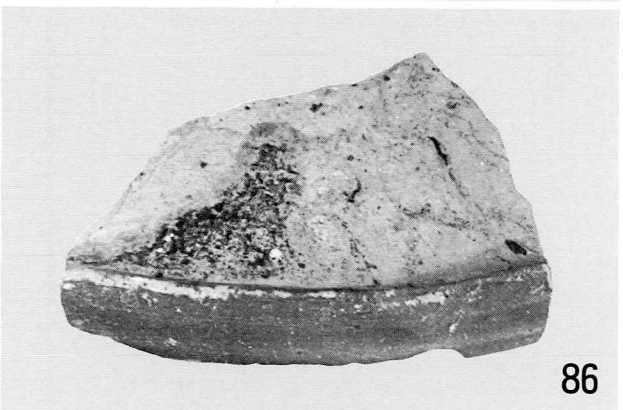
SK-120(40,42,45,46)、SK-124(30,29)、SD-301(26)、SE-301(24)
出土土器

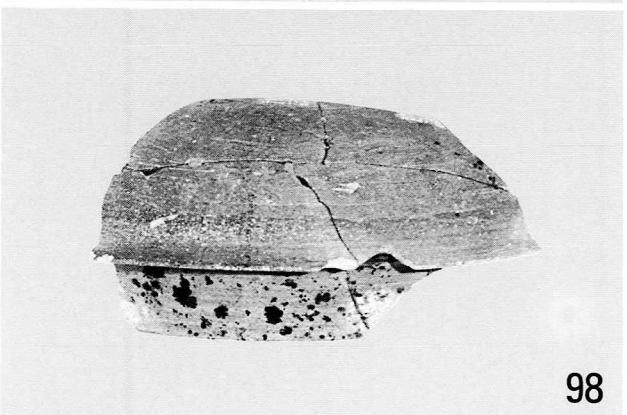


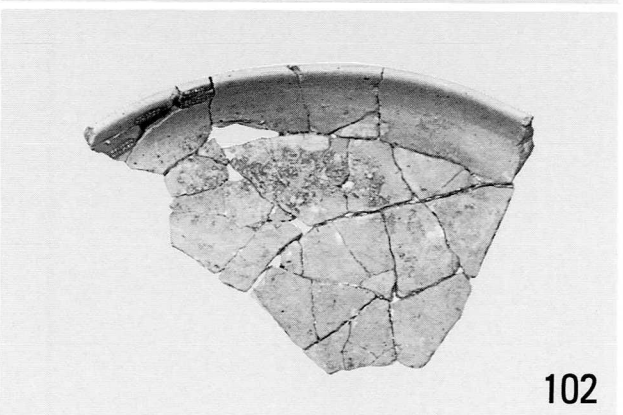






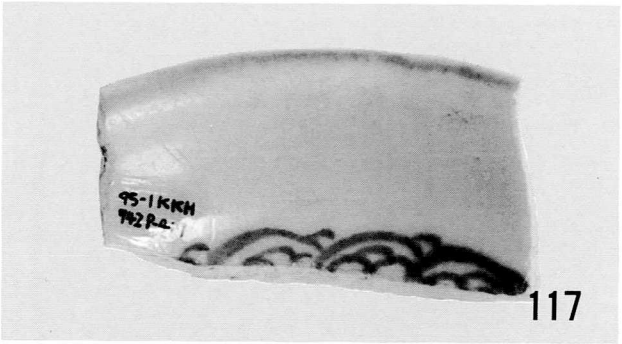


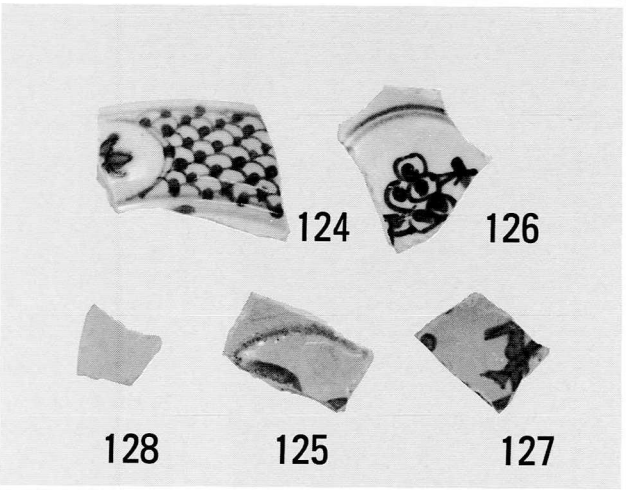


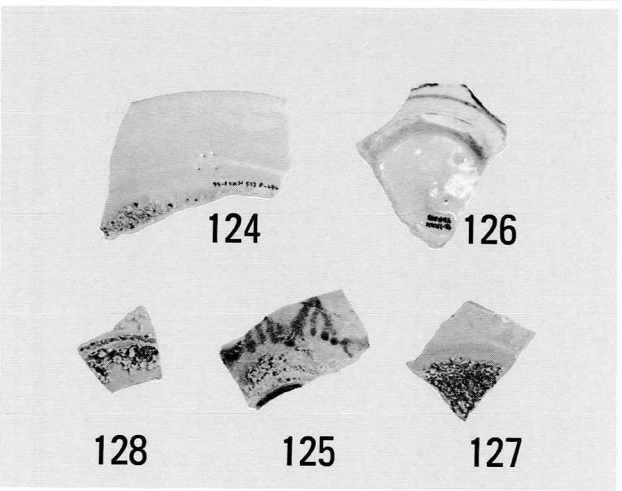


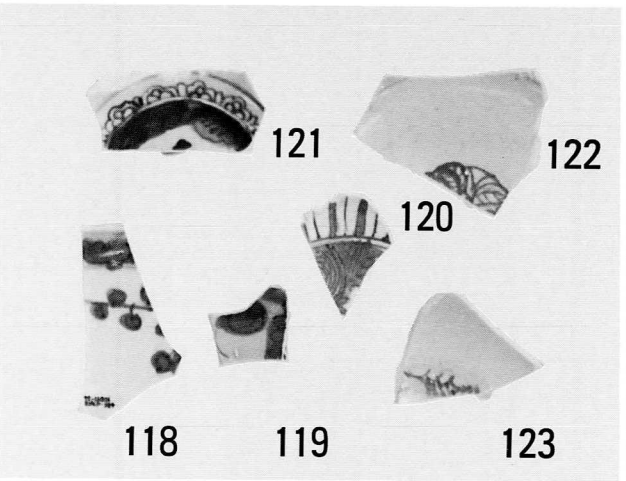
包含層　第２層(57)、第３層(59,68,72,76,78,86)、第４層(98,102)
出土土器

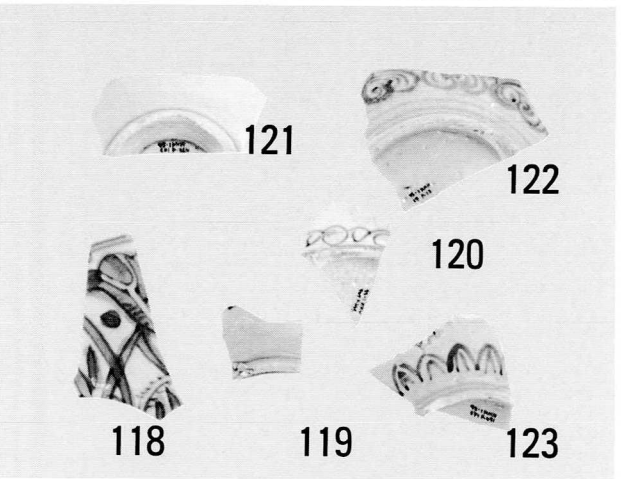
117

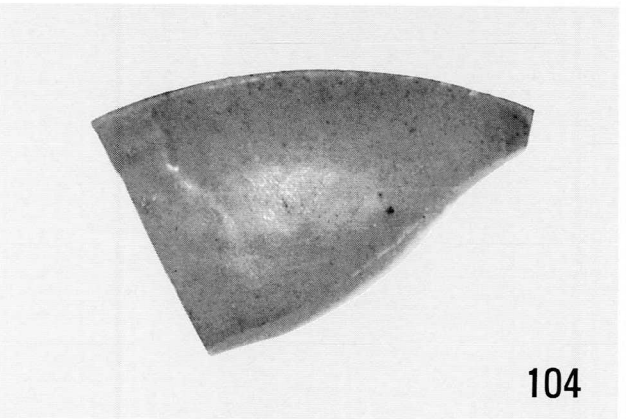

95-1KKH
117

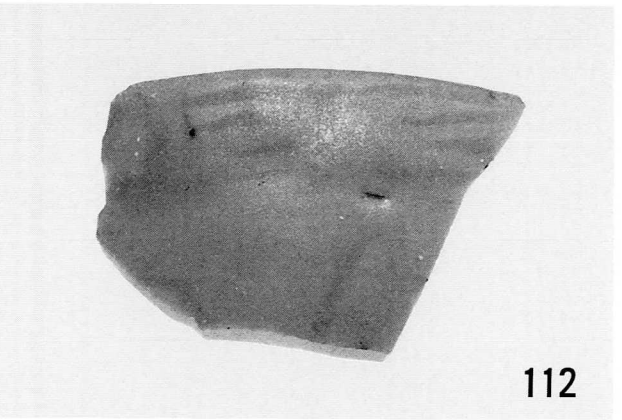

124
126
128
125
127


124
126
128
125
127

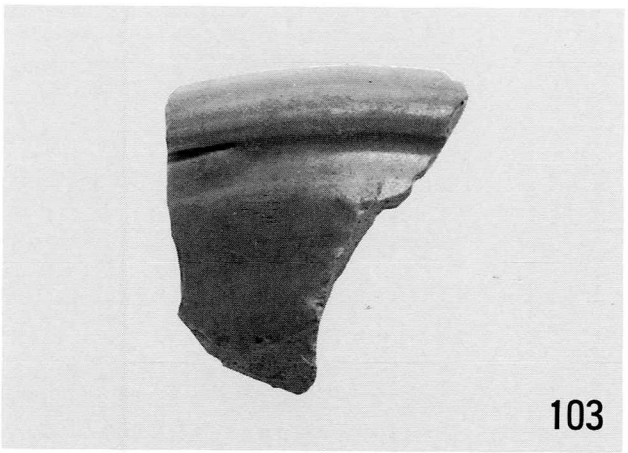

121
122
120
118
119
123

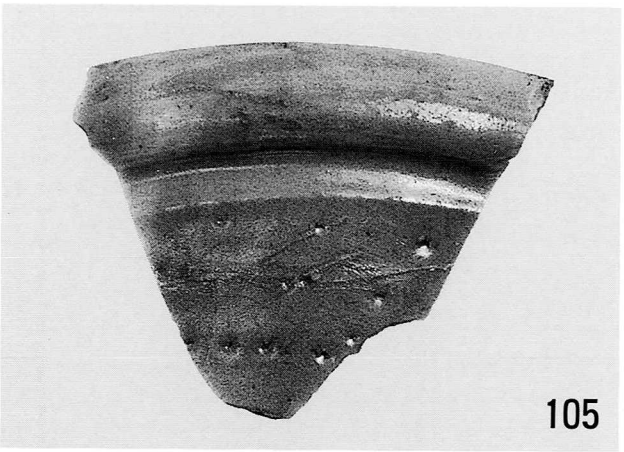

121
122
120
118
119
123

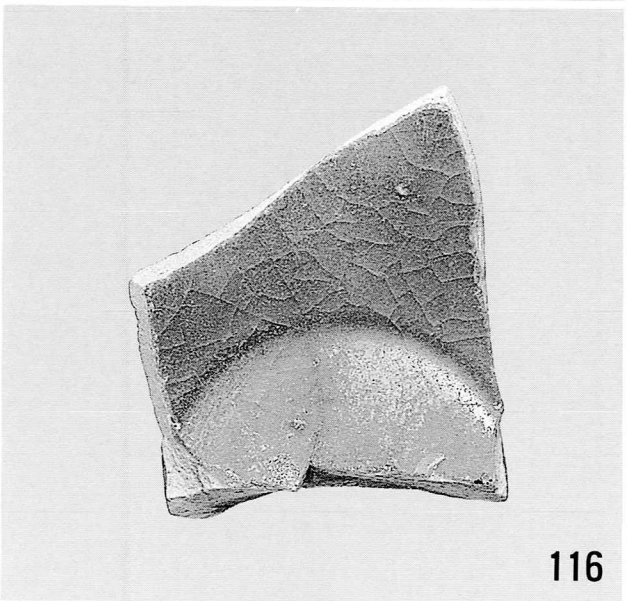

104

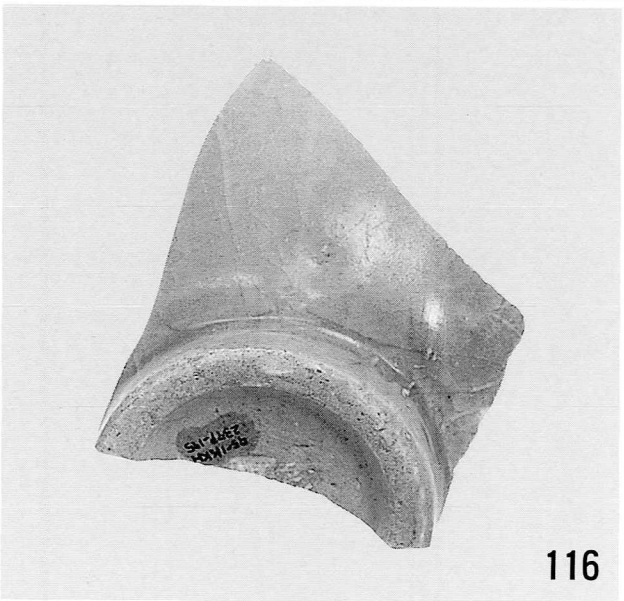

112

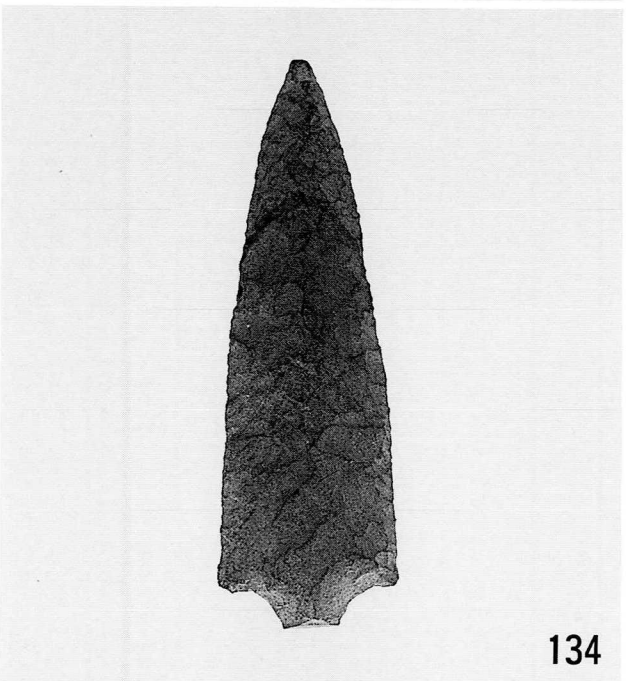
青花・白磁・青磁

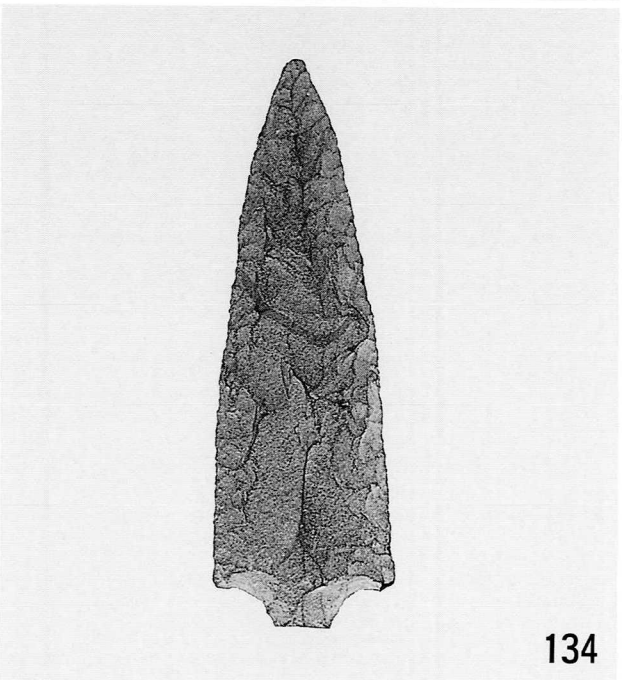












白磁・青磁・有舌尖頭器

貝塚市埋蔵文化財調査報告　第42集

加治・神前・畠中遺跡発掘調査概要

発　行　日　1997.3.31

編集・発行　貝塚市教育委員会

貝塚市畠中1丁目17番1号

印　　刷　摂河泉文庫(貝塚市北町20－18)